548
5

548
5

27

# 卷六

帝國圖書館藏

野口米次郎

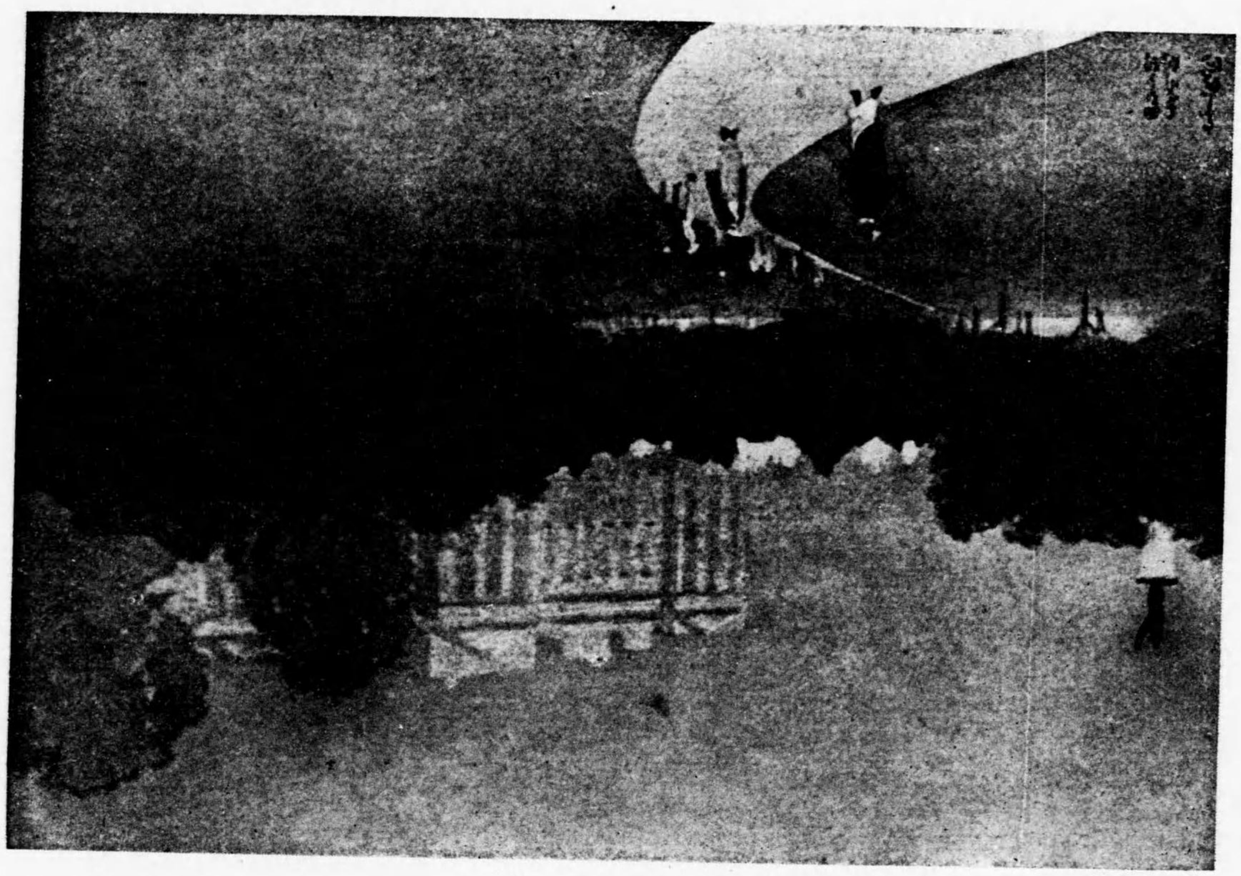
ブックレット

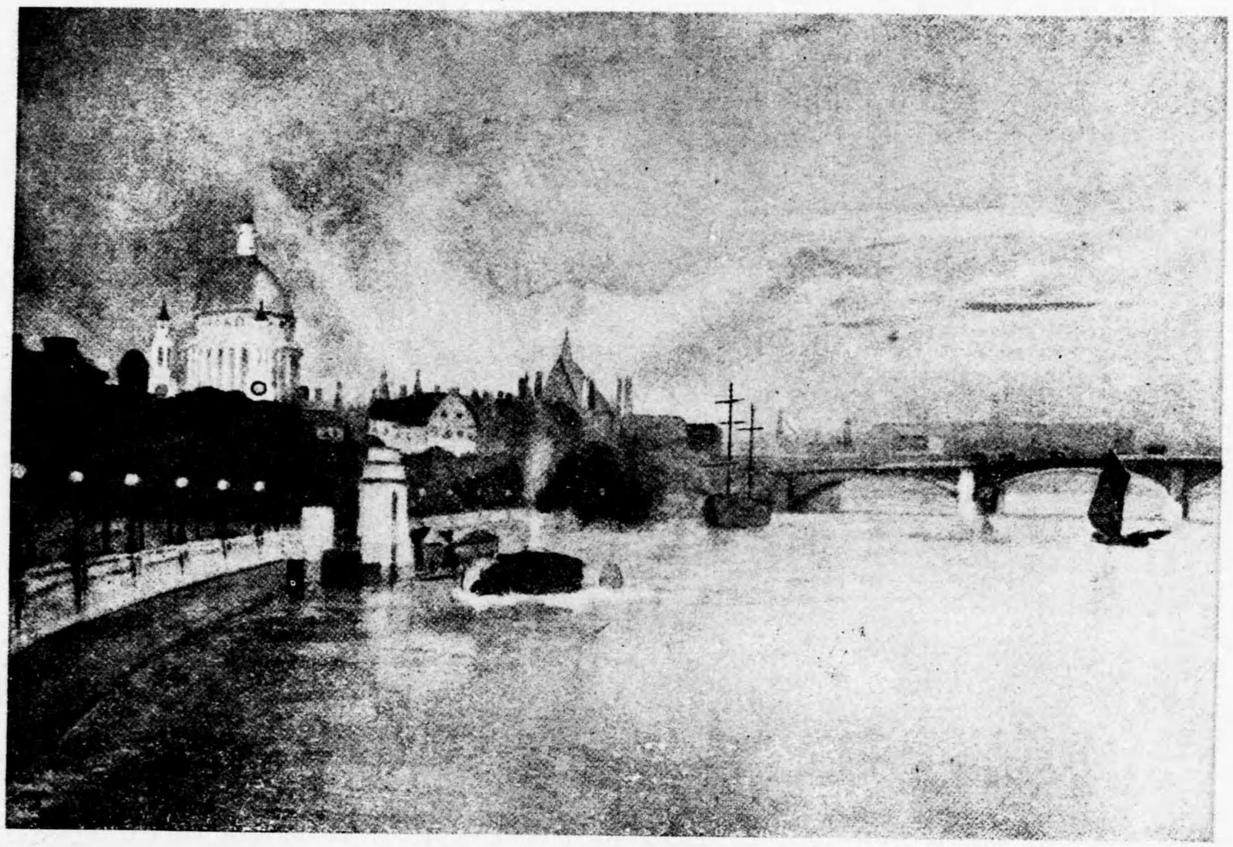
第二十七編

# 霧の倫敦

東京高輪
第一書房刊行

大正
15. 11. 9
内交





548-5

# 目次

倫敦の初印象……一
霧の倫敦……三〇
オックスフォード……五二
文學的英國……七一
文學界の英婦人……九一
口繪
ハイド公園
ウォタールー橋

# 霧の倫敦

# 倫敦の初印象

場所に依ると感情が疏通しない取附けないが、永年の外國生活のお蔭で、私はどんな始末にをへない場所でも打ち寛ぎ得る術を學んだ。私はそれを私の藝術と呼んでゐる。所がこの藝術が倫敦では何の役に立たないと感じた。私は今二十年前の倫敦印象を記憶するままに書く。

日本といふ國は多くの性質を持つてゐる……泣くかと思ふと直ぐ笑ふ。澁面作つたり無意味に怒つたりする。倫敦も島國の都會でさういふ所がある。常識を誇り乍ら非常識な樣子をする。私は向ふから友情を示さないならば敬遠主義を採らうと思つた……これが私の倫敦に於ける第一印象であつた。季節は秋の八月を過ぎた許りで、倫敦は追憶の感傷氣分に落ちてゐたかも知れ



ない。近寄つて來る冬に對する癇疾的恐怖に懸つてゐたかも知れない。私が一寸でも感情的な素振をすると倫敦は直ぐ苦い顏をするやうに感じた。これでは私と倫敦とはまるで敵同志だ。私は倫敦にゐられない。實際私はなんだつて米國の暮斯敦を離れた、なんだつて紐育を離れたかと悲しくなつて仕方がなかつた。かういふ工合で私は倫敦が不愉快な所だと思つた。然るに、觀光客としての二箇月も經つた頃、倫敦卽ち世界の最大都會は急に笑顏をし始めた……少くも興味ある顏を私に見せ始めたと感じた。私は倫敦と握手した。私は倫敦と一つに成つたやうに感じた。どういふ工合で私は倫敦の美を發見するに至つたかを語るとしよう。

時は十一月の一日で、時間は四時前後と思ひ給へ。夕食には間がある、然し一日の仕事はほぼ終つたといふ時分だ。この時になると私はいつもいらいらした好奇心に襲はれて來る。私は其日に倫敦で名高いウエストミンスター

寺院の脇に架ってゐる橋の上に立って居った。理由なしに立ったのでない……其日は倫敦人の所謂豆スープの日で、深い濃い霧に倫敦が蔽はれて理性を失って仕舞ふといふ日だ。私は始めて倫敦の霧なるものを見たのである。私は此處へ來て以來といふものは、倫敦は餘りに物質的意識に捉はれ過ぎるのが不愉快でならなかった。たった一度でもいいから、氣まぐれな擧動が出來るものなら遣って見ろと心の中で呶鳴りもして居った。然るに私が眼前に見る霧の倫敦は全く詩的である。必らずしも美麗とは云へないにしても面白い特殊なものである。地理を超絶してゐると云へる。薄黑い濃霧に包圍され乍ら橋の上に立ってゐると、私は夢にうなされてゐるのぢやないかとさへ思った。此場合私に緯度も經度の感念もなかった。私と私の周圍に集まって友情的素振りして飛んでゐる鳩との相違は何かと問ふものがあると、私は、鳩のやうな羽翼がないだけ違ってゐるのみだと答へたであらう。鳩が巫山戯た不



眞面目な樣子をするやうに、倫敦も理性を失って私に戯れてゐると感じた。この霧の倫敦は全く私の氣に入って仕舞った。テームス川の向岸に並んでゐる不愉快な汚い看板は霧で見えない……これが第一喜ばしい。傍若無人の恰好をしてゐるクレオパトラ・ニードルも今日は落着き拂って、いふに云へないほど優美を極めてゐる。私は頭を擧げた、さうして何を見た、橋をさし挾んで東と西に團扇のやうに大きな黃金色の太陽が二個出てゐるのを見た。私は驚いた。まったく驚いた……倫敦では太陽が二つ出るとは不思議だと思った。然し間もなく私の理性は東の方の『太陽』は月だといふことを敎へて呉れた。私は倫敦へ來て始めて驚異といふ意味が分ったことを喜んだ。私は聲さへ出して叫んだ、『これは愉快な繪畫だ、眞に繪畫といふことが出來る光景だ！』私の足の下では、テームス川が鉛のやうな灰色の波を流してゐる。そして其上を色々の舟がすべって行く。私はこの夢の浮橋に立って自分が古

事記時代の尊の一人でもあるやうに感じた。そして橋から乘降りて、下を通る舟にひらりと乘るやうに感じた時、私は次の小さい詩を歌つた。

『自分は霧の追憶を一杯積んだ小舟に乘つて……
灰色の生命の河をすべつて行く。』

私の師ミラーは詩にフォッグ（濃霧）の字を使つては不可ない。ボオが此文字を亂用した點だけでも彼は野卑だといへると云つたものたが、ミラーの好きなミスト（烟霧）といふ文字では間に合はない。ミストといへば輕快な春の陽炎を思はせるが倫敦の霧と來ると、全く鯱か鮫のやうに飛び跳ねてゐる。かういふ濃霧の日に限つて倫敦は詩に關聯することが出來るのだ。私は倫敦に到着以來、倫敦はどういふ關係を詩人のキーツやテニソンが持つてゐ



るかを疑つた。少くも倫敦人は詩人の言葉を語らないことを遺憾に思つた。私は時々英國人から私の米國式英語を笑はれたものだが、實際米國人の方が英國人より遙に純な正確な英語を使つてゐるのではなからうかと思つた。マシュウス教授の如き英語の本場は倫敦でなくて紐育だとさへ言つてゐる人もある。私は攻擊非難の心持で叫んだ……何處に一體全體英詩があるのだ。ナポレオンがいつたやうに全く小商賣人の都會ぢやないが、何とかいつた詩人は倫敦を『銅錢舐め』だと輕蔑したさうだ。面白い名稱を與へたものだ『銅錢舐め』とは痛快だ。外國人といふものは至極好都合なもので、氣隨氣儘にどんな批評でもいへる。無責任な言論が出來る。此外國人の特權を使つて、私は倫敦の商賣主義は鼻持ちならないと言つてのけた。然し、この商賣主義も冬の間は霧の面紗を被つて優美に見える、さう俗惡でないといふことを喜んだ。私は日中でも夜分でも、詩のことを考へ乍らテームスのエンバンクメ

ントを歩き廻つたものだ。私の記憶に從ふと、今は故人になつてゐるアーサー・デヲシーの宅でお茶を飲んで其處を出たのは夜の八九時の頃であつた。其晩は霧が深いの深くないのといつて、議論にならない位な濃霧の夜であつた。乘合馬車は止つて仕舞ふといふ騷ぎの夜であつた。私はその晩のことを次の言葉でかう書いた。

『南無三、路を失つた迷ひたりやだ！　べてん師の小鬼よ、僕を打棄つて置いて呉れ給へ、僕は月の光をたどつて花の谷へしのび込むのだ。』

散文的なことには花の谷へ到着せずに、幾時間もバッキングハム宮殿の塀や譯の分らない横町を手さぐりに歩いた末、ウエストミンスター橋へ出て仕舞つたことである。私がその晩ブリキストン・ロードの安下宿へ無事に歸つた時は既に眞夜中であつた。一週一磅の安下宿であつたから私の部屋には石炭が燃えてゐなかつたが、私を友人の牧野義雄が待つてゐて呉れた。牧野も



今日では著名な畫家であるが、其當時に於ける彼は文字通り赤貧洗ふが如き狀態であつた。若し私が彼より聊か幸運であつたといへるならば、云はば私の懷中に私の詩を讃美した文豪メレデスの手紙が横たはつたといふ一事の外何物でもなかつたのである。日本人に對する梅雨と同樣に、英國人は霧を嫌ふ。それは自然だ尤もだと云はなければならない。然し外國人の非論理的態度といふか、愉快な皮肉といふか、私は倫敦にこの霧といふ缺點があるので一層倫敦を喜んで愛した。其土地に生れると常識化する、又常識化しないと無理になる。所が私は外國人といふ特權を持つてゐる、そして私は英國人の常識以外に立つことが出來る。こんなやうな調子で、私は十年以上も此處や其處やと一種特別な態度で生活を外國で遣つて來たものだ。

倫敦の霧には不思議な美がある。でも英國人は詩にも歌はず繪にも描いてゐない。然らば彼等は盲目で其美を見ることが出來ないのであらうか。私は

彼等の前提が然らしめないのだと思ふ。牧野は倫敦の霧を繪の上で取扱つて藝術的エフェクトを擧げてゐる、そして彼等の眼を開けてそれを見せさせてゐる。私は霧の鑑賞がないと、倫敦の冬三月は全く堪へ切れないものだと思つてゐる。それを味ふには人生より年老つてゐる審美主義を理解しなければならないかも知れない。灰色な霧の姿は如何なるものよりも生きてゐる。霧に蔽はれた世界は暗明の世界だ、其世界では夢と現實とが永劫の一つの長い悲しみで結附けられてゐるのだ。灰色の霧の歌は最も氣高い歌だ。何たる雰圍氣が霧にあるであらう、霧の魔法に觸れると諸君は理想への不思議な路を求めることが出來る。日本の梅雨のことを考へると、此陰鬱な一箇月のお蔭で私共は忍耐の教訓を理解し反省的氣分を養ふことが出來る。一般的にいふと詩的でない英國人が詩的になり得るといふことも、冬期に於ける濃霧のお蔭であらう。日本の梅雨でも又英國の霧でも、人々を室内に追ひこんで自然



に家庭的ならしめる。英國人が霧の影響を受けないとすると、彼等の室内談話がさう明るく快活なものでなく、彼等の家の客室がさう完全なものとなることが出來なかつたかも知れない。實に英國で冬になると交際社會が一段の光彩を放つて來る、又倶樂部生活が一層懷しくなつて來る理由は、他なし濃霧のお蔭である。たれが倫敦の霧は不愉快だといふ！　さういふ英國人は不平をいふことだけ知つて、霧に對する恩を知らない人間だ。私はかういつたからとて必らずしも心理學的考察の邪道に入つてゐるのでない。

英國人に午後三時半のお茶は附物である。此『お八ッ』を抜きにしては英國人は考へられない。又彼等が目の前にお茶のカップと菓子を置いた時位、彼等の心持が定まり彼等の態度が完全と最善を示すことはない。彼等の談話は自由である方式に束縛されない。彼等の談話以上に私の氣に入るのは彼等の沈默である。言葉は銀で沈默は黄金だとはよく言つたものだ。彼等が『お

茶の時』に語る談話の題は雜多である。彼等の遠つた意見は珊瑚の紐のやうに手綺麗に整へられる。彼等の自由は清らかな谷合の水のやうに心の泉から溢れ出るのを感ずる。とんと彼等が客室の談話の上では形式ばらない點は實に尊敬に價すると云はねばならない。英國人の自由といふことは、私的な場合ばかりでなく公的な場合にも一貫してゐる。其處が彼等の偉い所だ。今假に『ハイド公園の一角』と言はれてゐる場所へ日曜日の午後にでも行つて見ると、社會主義者乃至は虛無黨の連中が宗教家などと隣合つて大聲を出して演說をしてゐる。英國人位演說好きな人間は又とない。又彼等位言論の自由を守る人間もない。どこを搜しても彼等には官僚的な點は微塵もない。この點から見ても、英國は住み心地の良い國である。故に英國は世界中の不平家や議論家の巢窟である。獨逸人でも露西亞の猶太人でも伊太利人でも乃至日本人でも支那人でも、平等の自由が許され、其權利が完全に保護される。私



は最初倫敦を冷い氷の倉へでも入つたやうに感じたが、四箇月もゐると大の英國黨になつて仕舞つた。英國人から午後のお茶に招かれてみ給へ……主婦は君に、『お砂糖は一つですか二つですか』と尋ねる。一つ砂糖を入れようが二つ砂糖を入れようが又砂糖なしでお茶を飲まうがそれは自由な英國だ。君が勝手に振舞へる倫敦の客室だ。君は喋りたいことを喋り散らし、默りたい時に默つて居れるのが英國人が君に許す自由だ。煙草の煙を相手の女の顏へ吹きかけて、其煙の中から彼女の横顏を眺め給へ、どんなに美麗に見えるであらう。私が近付きになつたレデーCといふ貴婦人は、伊達な喫煙家であつた。細い花車な指先で卷煙草を挾んだ樣子は如何にも優美であつた。彼女の皮膚は白く滑らかで、所謂英國女の皮膚といふ奴だ。此貴婦人が立去らうとする女の友達をつかまへて、『あなたウヰスキー一杯飲んでお出なさいよ』といつた調子に何といふ大膽さがあつたであらう。彼女は實に遊獵者肌の美

人であつた。今は故人になつてゐるが私は彼女を忘れることが出來ない。

英國人はどんな場合でも自分の國は世界第一の國といふ沽券を下げない。英國人といふものは文明と平和の保護者であらねばならないといふ自信に相應しい行爲をする。過去に於ては隨分如何はしい野蠻な態度を取つた歴史を持つてゐるが、今日ではさうでないと私は思つてゐる。彼等は恒産あつて恒心ある國民である。米國などへ行くと、直ぐ米國人から、『米國を何と思ふね』などと質問されるが、英國へ來るとそんな愚問を一人とても發しない。それは彼等が人に尋ねるまでもなく、立派な國だと自信してゐるからであらう。英國自身は日本同樣一少孤島であるが、其實質は擴大なものだ。倫敦は廣い大きい……そんなことは誰も知つてゐるが、私が前記のレデーに向つて倫敦は廣大だといふことを私の詩集出版といふことに關聯して語つたと思ひ



給へ。レデーCは鞠のやうな大きな眼を瞠つた、彼の女は笑聲を上げた、そして私に云つた。『詩人の足拍子の一つや二つで倫敦の舞臺が動くものですかね！』私はぎやふんと參つて仕舞つた。心中聊か不平なしでなかつた。然し倫敦は動いた。私が巴里で基督降誕祭する積りで別にして置いた三磅を棒に振り十六頁の小冊子を作つて倫敦の面上へ投付けた……倫敦の文壇は動いた。どんなに倫敦は巨大な胴體の象でも、撲る所はたつた一つだ……私は僅僅八章の詩で倫敦の詩壇に打勝つた。自分の口から言つては變であるが、八つ位の作品で英國を動かしたといふ例は他には有るまい。今日から思ふと、何だか奇蹟にも近いやうな氣がする。私は此詩集卽ち『東海より』を私の親友の老人スタッダードに獻上したので、早速倫敦に於る私の成功を報じた。老スタッダードは著名な南洋文學者でスチーブンソンの親友の一人、佛蘭西人からロチに比較されてゐるスタッダードは早速私に返事を呉れてその中に

こんな言葉が使つてある。

『親愛なる詩人よ、君の最近詩集を聞いて私に獻上してあることを見出した時の私の驚駭を君は想像出來るだらうか。私は感激の餘り狂せんばかりであつた、私は自分の身をどうしようか知らなかつた。私は君の成功を聞いて幸福に感ずる。今君は倫敦で認められた瞬間に、君は全倫敦の文學世界から認められた譯だ。バイロン卿のやうな君は今有名な詩人として目を覺ましたのだ。私の愛する兒よ、私は嬉しい、はなはだはなはだ嬉しい。』

私は果してバイロンの如く目を覺ますと有名な詩人であつたかどうかは知らないが、兎に角かういふ言葉で盛つてある手紙を喜んで讀んだ。倫敦は實に均整を無視してゐる程駄々廣い大都會だが、倫敦の文學心は無意味に漠然としたものでない。數の少い善良な文學者の指導で動いてゐると感じた。これで私は米國から詩の原稿を擔いではるばる遣つて來た甲斐があつたことを



喜んだ。かう詩の目鼻が附いて來たので、私の樂な氣分で倫敦で興味のある場所を訪問し始めた。

私は幾度テート畫館へ出掛けて其處に懸つてゐるロセチの諸作に親んだか知れない。私が彼の繪畫を了解したいからだ。ロセチの不自然は自然である。彼の形式的に精神的其物であるといふと、人はまた逆説を弄するかといふかも知れない。私はテート畫館を辭してしばしばロセチの追憶を辿つてチエルシーへ立寄りカーライル博物館を訪問した。賢者は山を好み智者は水を好むといふ言葉があるが、滾々として晝夜の別なく流れるテームス川から哲人カーライルの心を考へると、其間に相通ずるものがあるやうに思はれる。私が最後にチエルシーを訪問した時早春の細雨が煙の如くけむつて、廣重の木版畫を想像させるものがあつた。つい先頃私の友人が倫敦へ行つた時私は左の詩を彼に與へた。

「君が倫敦へ着く、チエルシーあたりのテームス河畔を歩く、多分春の細かい雨がしつぽり眼前の光景を濡らしてゐるであらう。
向河岸の家は靄の煙で包まれ、大様に濡れる水の上を舟が滑つて行く、
これは油繪の情調でない、淡い水彩畫の諧曲だ、
君は心の中で、君の前を歩くロセチやスウキンバーンを想像するであらう。
又君の後から、君の嫌ひなカーライルが跟いて來るのに氣付いてびつくりするかも知れない。
君は歩き草臥れる、休憩のつもりで手近のカーライル館へ入る、
そこに石膏で作つたカーライルの右か左の手がある、
君はそれを見て、「これは私の好きな手だ、カーライルも見直して來る



……
まるで白隱和尙の手だ、浮世離れした人間の手だ」と叫ぶであらう。
今でも年老つたスコッチ女の留守番がゐるであらう、私の厚意を傳へて
　呉れ給へ、
この女はきつとカーライルのことよりバーンスの詩を語るであらう、
若し君がバーンスの舊宅を見たいといふと、この女は君にイースターの
　割引切符で出掛けよと助言して、
汽車の時間表まで持出して丁寧に説明するであらう、
君は今カーライル館を去る、近所の安料理店へ入つて一杯のお茶を命ず
　る、
お茶は英國人の心のやうに寧ろ鈍重な味で口當が惡い、
然し君が一二年も倫敦で住むと、このお茶と同樣に鈍重な英國人を好く

やうになるであらう。」

チエルシーでは鶯の歌で、有名な詩人キーツは考へられない。それは無理だ。キーツを考へるならばハムステッドへ行かねばならない。ハムステッドは人間生活からもさう離れず又神にも近い場所だ。ヂョウヂ・デユ・モリエーといふ漫畫家があつて、今此處に埋められてゐるといふことだが、ハムステッドはキーツの專有であるやうに思はれる。然し鶯は啼かない、少くも今は啼かない。そして澤山ゐる鳥はつぐみの一種だと聞いても何も怒るにあたらない。私は三月の末のある午後、友人と一緒にハムステッドへ出掛け、地中から頭を出しかけてゐる菫草を見附けた。私はやれやれと背伸びして、倫敦もハムステッドの黑い外套を捨てる時が來たことを喜んだ。然し悲しい事には、私は紫色の陽炎がハイド公園を包み始める頃に倫敦を去らねばならな



かつた。私はブリムロース・デーに櫻草の花束をディスレリの銅像に捧げることも出來なかつた。それでも私はしばしば其銅像の邊、ウエストミンスター寺院から橋へかけて散歩した。私は橋の上からセント・ポール寺院を眺めて『倫敦は麗はしいな』の言葉を投げたことがある。さういふ時に私は左の詩を書いた。

『鳩の聲は夢の如く靜かに
怠慢の微光の上に落ちる。
「無終」は黃金の寵愛に轉ぶ。
私は認知の世界と人間の希望に遠ざかつた。
遠くて近い鳩よ、汝が見る如く、
私は匂ふ平和に示顯する眞理を知つてゐる。

鳩よ、汝の眼に世界人生の恍惚がある……汝の小さい背中に大きな空と
光明。
私が水を眺める汝を見る時、私は汝の思想を讀むと考へる……
「水の運命と美は時代と生命のそれである。私共をして滿足を深さの胸に
横たはらしめよ！」

いくたびか私はこの橋上に立ち、いくたびか立ち去るのを嫌つた。
昔ウォヅウォスは私のやうに、靜かなること水の流れの如く、
頭を垂れ、悲しき歩を此處へ運んだのでなかつたか。
鳩よ、汝は將來の人に、東方の一放浪者がここへ來て、
汝の聲に人生と歌の豫言者的戰慄を聞いたと語るであらう。」



私は最初の訪問でも二度目の訪問でも、普通の觀光客として英國へ行つた
のでない。故に英國博物館乃至は國民畫館のことなど一般的に書くことが出
來ない、又書くことを好まない。然し英國博物館に關して忘れることの出來
ないことがある。ウヰリアム・ブレークが自分の手で彩色した大きな詩集を
始めて一覽することが出來た事で、其時私は藝術は人生より長いといふ言葉
の生きた證據を見たとつくづく感じた。その他もう一つある。博物館の東洋
部の一室でDといふ一老支那學者に面會したことである。其當時この人は既
に七十以上であつたやうに見受けたが、老眼鏡をかけてこつこつ支那の古典
を讀んで居られた。私の顏を見ると、いきなり其書物の不審な個所を質問さ
れたので、私は非常に辟易せざるを得なかつた。かういふ老研究者が英國に
うぢやうぢやしてゐるから英國は偉いのだと感服した。
私はしばしば國民畫館へ友人の牧野と一緒に出掛けたり、時に依るとAと

いふ英國人とも行つた。私の一番好んで鑑賞の腰を椅子に下したのはターナーの部であつたが、ラスキンのターナー論を讀んでゐないので、彼を自分の眼で直接に見ることが出來ると喜んだ。私はこの英國人Aとターナー・ルームに腰掛けて議論を闘はしたことがあつた。私の美術論の立場は、『繪畫は主觀的であるものだ』といふにあつて、東洋藝術の美を力説し、進んでターナーに移ると私は言つた、『彼には技巧上の缺點がある。それが君の目に見えないのかな！　私は議論の都合で彼を主觀的畫家だと呼ぶのだ、いな、彼は西洋畫家中で最も東洋的な人だ。』さうすると私の相手のAはかういつた、『なるほど君のいふ通りターナーに缺點があるとして、それが何だ。技巧が完全でないお蔭で私共は樂に眺めることが出來るといふものだ。この繪の煙を見給へこの舟を見給へ。私自身では完全な技巧だと歎美せざるを得ない。この繪のとこでもいいから一寸四方なり二寸四方なりを切取つて見ても、其



自身が完全な繪になつてゐると信ずる。』　それから私共二人はターナーの水彩畫から始めて詳細に彼の藝術を眺めた。私が、『色彩が餘りに驚くべきであるから不自然だ』といつても、私の友人は私に降服しなかつた。英國人として彼の態度は是認すべきものであつたが、私の論點を彼は理解しなかつたことを悲しまざるを得ない。私がターナーの技巧を輕視しようとする理由は彼の想像と藝術的衝動を重大視しようとする希望に原因してゐる。彼の繪畫の後に歌がある熱情があることを力説しようとしたものであることをAは了解しなかつたかも知れない。然し私のこの議論は今日ならば英國人でも容易に了解する所のものだと思ふ。して見ると西洋の美術論も近頃は東洋化して來たといふことを思はない譯に行かない。

寺といつても倫敦で印象の深いものはウエストミンスター寺院である。北の入口から院内に入ると政治家連の側堂で、其處にディスレリやグラッドス

トンの胸像が立つてゐる。私は其等のものを見ると半ばの敬意と半ばの皮肉を感せざるを得ない。そこを過ぎて詩人共の永眠所へ急ぐとする……倫敦を數千哩も離れて時代を幾百千年も溯つたやうな氣がするであらう。テニソンは素朴な力と修養の感銘を人に與へたと聞いてゐるが、彼の銅像を見ると婚禮菓子の一種であるといふ感なきにあらずであつた。チョウサーに胸像がないのは至極結構だ。ただ大きな大理石に名前だけが彫つてある。ゴールドスミスは書物に書いてあるやうに醜男子だ。彼の像を見ると獅子鼻が特別目立つ。これ等の文豪の像の間を歩くとだれかの靈が私に語るやうな氣がする。その言葉を聞くと、『この死を取り去つて呉れ、又この名譽といふ奴もだ！僕は生命と日光の一片にも喜んでそれを交換する。私が偉人だつて……それは嘲弄の言葉ぢや。此偉人といふ奴位私の嫌ひな言葉はない。私が實際偉人とした所で、私はそれを生きた風の一吹に交換して仕舞ひたい。再び生命を



取りかへして、私は小雨降る春陽四月の香氣を再び臭ぎたいものだ。』此處にゐると私は段々呼吸が詰つて來るやうに感じた。

私が倫敦を去る前もう一度倫敦塔を見物に行つたが、場所に相應しい憂鬱な日で、昔塔の中に幽閉されたり又は斷罪に處せられたアン女皇とかレデー・ジエーンの幽靈が出沒してゐたやうに感じた。冷い空氣が塔に滿ち、荒涼たる太陽の鈍重な光線は、悲哀と悲哀との間を辿るやうに思はれた。私が半ば開いた眼を塞ぐと、私は後に柳の葉の搖れるやうな嘆息の聲を聞いた。私が再び半ば眼を開けると、彷徨ふ香氣の中に一婦人が、白いレースを直してゐるのを見たやうに感じた。私は叫んだ。『貴方よ、あなたは古い血と悲の幽靈かも知れない。貴女よ、あなたは古い熱情の夢が凝つたのであらう。あなたはレデー・ジ〜ーンかアン女皇では有りますまいか。』私は塔の中にゐたたまらないので恐ろしい戦慄を感じて早速其處を立去つた。

# 霧の倫敦

私が巴里を辭しヲステンドからドバーへ海峽を渡り、鐵路倫敦（倫敦といつても何處が眞實な倫敦だか知ることが出來ない奇怪な都會だから、チャリング・クロス停車場といつたはうが適當かも知れぬ）へ着したのは冬に入つた十二月の某日、十年目で再び見る倫敦の霧！　私の心がどんなに不安と喜悅で震へたであらう！　私の滯英日記をひろげるとかう書いてある、『漂泊した古材木の一斷片のやうに私は倫敦の中へ投出された。耳を劈く大都會の聲だ。それは愛蘭土の詩人ライオネル・ジョンソンが歌つた「或るものは高慢な、又或るものは悼しい呼吸をし乍ら死へと急ぐ進軍の聲」である。倫敦は果して私に笑ふか、はた又澁面を作るであらうか。見よ倫敦は一面に霧の



灰色で包まれて非現實的な外觀を具へてゐる。トラフアルガー・スクエーアのネルソンの銅像は恰も海上に立つてゐるやうに見えた。否、深い霧の爲め靈となつて天空に消えるかとも思はれた。私は幽靈を見たハムレットの如くおづおづし乍らスクエーアへ接近すると、私は背の高い瘠せた女（美人を巴里で見て來たばかりの私の眼に如何にも醜婦だとその女が映じた）から呼びかけられた、「サフレジエト（The Suffragette）一部買つてください！」私は心中あゝこれが音に名高い婦人參政權運動者だなと思ひながら行過ぎた。このトラフアルガー・スクエーアは人に云はせると「歐羅巴第一の勝地」だ。又ある人に云はせると「土瀝青の無趣味の荒地」だ。私はすたこら今夜眠る旅館を求むるべく急いだ』文章の初めから長い引用でいささか恐縮するが、私が十年目に再び見た倫敦はトムソンが歌つた『恐ろしい夜の都會』そのものの……霧の倫敦であつたことを第一に諸君に告げたい。

私は私の出版者の案内で以前畫家のウヰスラーが至つて贔屓にしたといふピカデリー附近だが驚く程物靜かな町のガーランド旅館へ身體を落着けた。けれども、なにがさて暫く目に倫敦へ來たことであるから容易に眠れない。再び着物を着替へて霧の夜景を眺めに旅館を飛出して、平安ならぬ倫敦の坦坦たる大道路ピカデリーを下つた。暫時歩いて左手に有るグリーン・パークへ踏込んで其處に据ゑてある椅子に腰掛けた。靴の下でがさがさ音がするので電氣の燈火でよく見ると冬ではあるが青々した芝生だ。少々古風な修辭だが私は『冬尙ほ青い草のやうに永久に年若く新鮮な倫敦』を祝福した。歸路についたのは最早十二時近くで、通りすがりに私を一瞥する微笑の Sinen 否な辻君三四人、灰色の霧を通して見る彼等の意氣な姿『之は繪になるわい』と私は思つた。諸君、若し君等が倫敦の大光景の一を見たいと思ふならば、ピカデリー・サーカスの方からリゼント街の Quadrants（街が四分圓に曲が



つてゐるからさう云はれてゐる）を見ることだ。これが歐羅巴で最も壯大な觀物の一でないといふ人があるならその人の名前が聞きたい。殊に霧の晩で人の往來も少くなつた時刻に見たならば、私のやうに誰でもその傍若無人な偉風が一層水際立つて浮いて見えるのを感ずるであらう。

私が倫敦へ到着してから一週間ばかり朝から『霧の倫敦』で、其頃私が書いて倫敦のウエストミンスター・ガゼットに寄稿した小品文中にこんな文字が發見せられる、『私はある朝モニユメント停車場を出て、ビショップス・ゲート（倫敦の町の名前位興味の深いものはない京都の町の名前以上だ）をさして歩いた。ぼてぼてして魚か何かのやうに泳いででもゐるかと疑はれるやうな霧が狹い道路を流れてゐる。頭を上げると兩側の高い建物が丁度耳語でもしてゐるかと思はれる程度に双方から肩を接近させてゐる。そして霧のなかを金に饑ゑた魑魅魍魎が走つてゐるのだ。之は冬の倫敦で最も特徴ある

光景の一だと思ふ。それから更に私を動かした一光景を語りたい。ベースウオターの一友人に晩餐に招かれて、夜おそくランカスター・ゲート停車場で地下鐵道の列車を待つた。地下幾千呎といふ穴のなかで、夜が更けてゐるから乘客は一人も居らぬ。私はこの時嘗て感じたことがない不思議な、私の皮膚をみしみし嚙むやうな沈默に觸れた。この沈默は自然が生んだ沈默でなく近代の科學的組織力が生んだ不自然な沈默である。若しや出る穴が突然塞がれたならば私はどうするであらうと思つて戰慄した。此處はきつと地獄へ近いであらうとも思つた。「深夜の地下鐵道の沈默」……これは近代の新詩人が歌ふ好題目だ。諸君さうは思はないか。』

倫敦の冬に霧（醫師に言はせても倫敦の霧は身體に決して障らぬさうだ）がなかつたならば倫敦の建物はどんなにその美觀を減ずるであらうか。私が滯在した旅館の附近にまづ第一に國民美術館がある。それから又私が倫敦の



寺院中で一番好きなセント・マーチンス・イン・フキールドがある。この小寺院は建築上から論じても倫敦切ての建物として尊重すべきものだ。それに加へて霧に包まれた場合にはどんなにこの小寺院が夢のやうな非現實は麗はしい趣を添へるであらう。大英博物館の如きも等しく冬の霧の恩惠を多大に受けてゐる。霧があればこそ、その建築に薄黑い澁味が附き、霧を通じて見ると如何にもそれが莊嚴に又氣高い印象を與へるのである。私は『冬の霧の大英博物館』を見舞つて、思ひもよらぬ稀有な光景を見る機會を得た。私がその圖書室へ踏入つた時私は、『英國人と生れてこれ等の書物に手を觸れ且つ含まれたる眞理を味ふことが出來るに對し心からの祈禱が捧げたい』とか言つたサカレーを思出した。今私は支那學者として有名なジャイルス君と一緒に、諸文豪の名前が刻してある圓天井へと段々を上つてゐると思ひ給へ。かういふ高い場所からずつと下の讀書室を眺めおろした光景だ。霧の冬のこ

とであるから時間は四時前後であるに係らず、幾百といふ青黑い笠を被つた電燈が點いて、それが机の上へ丁度少い氷溜のやうな影を落してゐる。實にそれは美觀であつた。頭を上げると世界に二つとない巨大な圓天井が沈默を包んでゐる。私は實際この莊嚴と麗はしい驚異に擊たれて一時神經を失つたと云つても決して誇張でないと思ふ。然し時が霧の冬でないならば私の感じはかく嚴肅な壯重なものでないに相違ない。私は冬の倫敦を詳細に見たことを感謝するものである。霧の冬の倫敦には人を動かす壯麗な光景が多いのである。私はそれを見てゐる。

春の霞のやうな淺い霧が懸つた日、私と一緒にホルボーン・サーカスの活動を僅か幾百碼離れたリンコルンス・イン・フキールドへ急ぎ給へ。この靜寂な一小公園を別に用事とてはなく自由に彷徨ふと、奮鬪的人生の幹流から故意に離れて出世間的な獨りよがりの貴い味を嘗てゐるやうな感じがする。



此處にある葉のない冬の樹木は淺霧が棚引いてゐる爲めに時ならぬ紫色の花を咲かしてゐる。これを譬へると差詰め『蓬萊山の繪』である。眼前の光景が陽炎のやうに輕く又浮動する香氣の如く自由である。夢が不思議な影と合體し、記憶が歌の音律に搖れる蜘蛛の巢のやうに非現實との兩境に懸つてゐると批評することが出來る光景とは、卽ちこの『淺霧のリンコルンス・イン・フキールド』だ。倫敦には此種の小公園、……其處には人情化した小さな樹木が一杯生えて殆んど個人的に近い空氣を持つた小公園が澤山造つてある。日本の東京のやうな粗末なバラック型の都會とは違ふ。東京などは日本（西洋人に云はせると美術的な日本の帝都）といふ資格はない。倫敦の小公園のなかを歩くと、我々臨時の訪問者は特別の許可を得て匿れた貴族の內庭でも見てゐるやうな感じがする。

然し倫敦も段々米國化する運命を持つてゐると見えて、何時迄かういふ精

緻な麗はしい空氣を維持し得るであらうか。何處はさて措きテンプル（The Temple）と稱されてゐる一廊だけは近代的騷擾を感ぜしめたくない。此處に古い灰色の四角形の中庭がある。又此處に芝生のなかからぶくぶく泡吹く泉水がある。如何にも十八世紀の文學的歴史が所謂十字軍の思想と交つた大學町の香氣が豐かに殘つてゐる。霧の冬この古色掬すべきテンプルを散歩するとどんなに荒凉たる悲哀に擊たれるであらう。いつも老ジョンソンの無遠慮な皮肉の槍玉にあげられた憐れなゴールドスミス（不器量な男であつたが虚榮心の強い衣裳道樂で青いけばけばしいチョッキなどを着こんで駝鳥の恰好で歩いたと聞いてゐる）が此處に永眠してゐるが、死んで迄もウエストミンスターで老ジョンソンの側にゐるよりは結局此處を愉快に思つてゐるであらう。私の愛するチャールス・ラムはかう書いてゐる、『何たる愉快な寛容な外觀が此處にある。三方面から此中庭を眺めてゐる。古色莊嚴な建物はハー



コートと名附けられてゐる輕快喜ぶべき建物と相對して、私の生れ場所である陽氣なクラウン・ヲフ＊ス・ロウも此附近で……かういふ場所に生れると云ふことは可なりの大事件だ。』テンプルは倫敦中で一番香氣の高い特色を持つた一廊だ。倫敦の冬でも時には、一天澄み渡つて玲瓏玉の如き月が輝く夜もある。私はさういふ鮮かな冬の月夜にこのテンプルを獨り歩いて、詩人シモンズが『啜泣きする月へ涙の呼吸を庭が吹きかへす』と歌つた實際の光景に接したことがあつた。私はその夜を今に忘れることが出來ない。私は倫敦の冬を愛するのだ。

不思議なことに私が滯在中、月曜日となるといつても晴天で、私は旅館の部屋で溫い珈琲を啜り乍らセント・マーチンス・イン・フキールドの寺院から撞出す銀鈴のやうな鐘聲を聽いた。巴里の日曜が段々倫敦の日曜化して來ると反對に、倫敦の日曜が騷々しくなつたと云ふ英國人の不平を耳にしてゐ

るが、まだまだ倫敦の日曜も英國式な靜謐を依然として失つては居らない。耶蘇教信者でない私でも不思議な氣分に誘はれてセント・マーチンス・イン・フキールドへ出掛けたこともあつた。この寺に何とかいふ英帝王の妾で美人の評判高かつたネル・グウキンが埋つてゐるといふことも私の旅情を唆る一理由でもあつた。兎に角この寺院の建築の單純さ、……霧の深い朝など、横柄な態度のホワイトホール街の方から歩いて來て突然その女性的な灰色の柔和を眺めた時、どんなに喜ばしい輕快の印象を得ることであらう。倫敦の大伽藍セント・ポールは足を延ばすことが出來ないやうな窮屈な場所に建つてゐる。そしてウエストミンスターには富と莊嚴の表情があるけれども、何となく田舍臭い。

諸君、若し君等がこのウエストミンスターを見物（或は研究の文字を使つてもよい）するならば、薄暗い霧の朝を選ぶに越したことはないと思ふ。少



くも輝いた日光の日に於てのやうに詩人連が葬られてゐる所謂 Poets Corner も古道具屋よろしくの感を人に與へない。其處に建られてゐる詩人の彫像には、例に依つて天女だとか裸體の赤兒などが彫像の臺にくつ附けてあるのだから到底二十世紀の今日とは考へられない。北側から寺院へ入らうとするときつと繪葉書賣からロングフェロウを一枚買へと强ひられる。實際見物人の大部分が米國人なのだから日本人でも繪葉書賣の眼には米國人同樣に映ずるのかも知れない。私はいつも半ばの尊敬と半ばの皮肉を感じ乍ら『政事家の通廊』から入つた。そして詩人連の場所へいつて、テニソンの立派な胸像の前に立つた時は、急に千哩も倫敦から離れて又時代も千年位逆にもどつたやうに思つた。テニソンのことを書いたものを讀むと、彼は美男子といふよりは寧ろ偉大丈で、何處か素朴と修養とが抱合つてゐるやうな點があつたさうである。して見るとこの婚禮菓子然とした美麗な胸像は彼を眞實に代表した

ものでない。『この夏から花咲く野邊耕作された田野の香氣が漲る』といはれてゐるチョウサーの記念こそ實に氣に入つた、……唯一個の大理石に彼の名前が刻つてあるだけだ。私は此邊を彷徨してゐると是等の文豪が一度に目覺めて喋べりだしたならどんな光景を呈するだらうなどと愚にも附かぬことを考へたこともあつた。或る日のこと老ジョンソンの眠つてゐる場所に痰が仕掛けてあるのを發見した。博士が生きてでもゐたなら大事件が起るに相違ない、……彼はどんな痛烈な警句を吐くことだらう。

ハイネは言つてゐる、『佛蘭西人は自由を花嫁のやうに愛し又獨逸人は自由をお婆さんのやうに愛し更に又英國人は自由を正當の妻君のやうに愛す』英國へ來ると誰もついぞ自由を力説するものがない、……人間は一人としてこの自由を持たぬものはないと思つてゐるからであらう英國位自由な國は無い、勿論自由國でその實不自由な米國などの比でない。私など滯英時々日本



服で街上を歩いたことがあつても、人一人私を不思議な眼で眺めようとした物好きは居なかつた。空の晴れた冬の倫敦の日曜日にでも、日本服だらうが又支那服だらうが何でもよいから、澤山溫く着込んでテームス河畔を散歩し給へ。別に急ぎもしない小舟を此處其處に見るけれども、昨日に替つて河は洗つたやうに清い。これを見たものは必らずウォヅウオースの詩句を心に思ひ浮べるだらう。

"O glide, fair stream, forever so,
Thy quiet oul on all bestowing,
Till all our minds forever flow
As thy deep waters now are flowing."

かう私が書いて來ると冬を背景とした倫敦の案内記でもあるかのやうに人は思ふかも知れぬ、案内記としてさへ役に立てば至極結構だ。私は讀者に倫敦の霧の冬を紹介したいが爲め今禿筆を握つてゐるのだ。勿論外部に霧を持つた冬の倫敦は、家の内には盛んに燃えてゐる火を持つてゐる。倫敦の冬の生活は晩餐の愉快である。倶樂部の愉快である。極寒でも日本で思ふ程寒くない上に、家屋の設備とそれを善用する出費に堪へるのが英國人だ。實際英國人たる所をその生活狀態に見ようとするならば、冬の彼等を知らねばならぬ。私は倫敦を一月の末に去つて、『半ば僧侶で半ば中世紀の裁判官』みた様な大學教授がうぢやうぢやゐる牛津へ出掛け、其地の大學モウダレンに一晩宿泊して、如何にこの大學總長（ワーレン博士は英國皇太子の師）が權威ある而かも平民的な生活をしてゐるかを見た。牛津の冬の生活は、時間時間に撃ち出す寺院の鐘と重ねる酒杯が面白く絡み合つた生活である。牛津から



私は畫家バーソンや、米國女優で今では伊太利の貴族に結婚したマリー・アンダソンの住んでゐるブロウドウエーといふ片田舎へ出掛け、それから轉じて私は沙翁の古跡を見舞つた。私が歩いた英國の田舎には勿論倫敦の深い霧はない。然し何處を見ても荒凉たる光景を呈してゐる點では何の相違を知らない。

私が英國の笑ひ始める春の消長に接したのはウキリアム・ゼ・コンクエローが最初建てた宮殿として有名なウキンザア城から程遠からぬイートン學校と詩人グレーの古跡を見舞つた時であつた。私が一本筋の大道を歩いて行くと三々伍々連立つて、所謂イートン・ジャケッ（尻までの短い上着）に禮帽の扮裝をした學生に遇つたが、早や彼等はほんのりとした春霞を肩に背負つてゐるやうに感じた。彼等はみな十二三の子供であり乍ら大きな煙筒を輪切りにしたやうな帽子を載せてゐるのだから隨分滑稽に見えた。私の空想は其等

の學生の中に詩人グレーの子供姿を發見したいとも思つた。グレーは劍橋大學へ入る前イートン學校に在學して、時の首相の伴フルボールと一緒に青々した春の木蔭でバジルの詩集を繙いたと彼の傳記に出てゐる。私を招待して呉れたイートン學校長マクナテン氏の邸宅に着くと、私はその入口に一面に咲いてゐる眞白な小さなスノウ・ドロップのあるのを見附けて、顏を上げて空を見ると最早や英國の春は眼前に來てゐると感じた。時は二月の下旬で朝からの細雨は止んで、溫和な太陽の光線は澤山のイートン學生を快活に運動場へと誘ふのであつた。ああ英國の春は今や此處にあると私は叫んだ。

私は背の高い英國式の紳士マクナテン氏に迎へられて直ぐ氏の食堂に導かれ、氏の妹さん二人と三人一緒に見事な晝食の御馳走に成つた。食卓の上を見ると、此處の花瓶にいかつた小さなスノウ・ドロップが置かれてゐる。この花こそ英國へ春を齎す第一の使者であるのだと思つた。食後私は氏直轄の寄



宿舍を訪問して其處で昔學生が食事に使用したといふ粗末な厚い板を見た。この板は皿の代用で魚でも肉でも野菜でもぢかに其上へ盛つて食べたものださうである。學生の部屋を一二見て廻ると、空氣も早や溫いので部屋の窓は打開けられてゐる。單純な寢臺の脇には運動服や運動の道具が一杯散亂してゐるのを見ても如何に英國の學校で屋外遊戯を鼓舞奬勵してゐるかを察することが出來、從つて如何に彼等が春に對する熱烈な愛を持つてゐるかを想像することが出來た。それからイートン校へ案内せられ、先づ第一に英國の文豪や政治家が學生時代に着席したといふ小さな講堂へ行つた。其處に据ゑてある木の机は時代の爲め黑光りしてゐて、一つとして學生の小刀の惡戯が印されてゐない物はなかつた。古い歷史的机を昔のまゝ使用して新規の物に取替へぬ所に英國的保守主義がある。大講堂の鏡板に彫られた澤山の著名な名前を讀んでから、方庭を取卷いて建築されてゐる建物の廊下を飾る種々な學

小鳥の聲は至つて平和であつた、又優美であつた。私は知らず識らず『英國の田舍の春なるかな』の嘆聲を發した。今日ではストーク・ホジスには樅の木が澤山だが、グレー時代には楡の木が一面に繁茂してゐたさうである。着いて見ると寺院は小さなゴシック型の建築で、其兩側に並んでゐる寺院の墓地の木蔭に、グレーの詩通りの無名の墓が芝生の上に散亂されてゐた。私は地内に澤山咲いてゐた花の中から、私の好きなスノウ・ドロップを寺院の石の壁に這ひ上つてゐた蔦の葉五六枚と一緒に摘んでそれをそつと衣嚢の中へ忍ばした。私が倫敦へ着いて私の旅館の窓から見た蔦には、冬であるから葉などは一枚も着いてゐなかつたものだが、今や英國も早や春に入つたので青青した葉が一枚蔦に生じてゐる。春は愉快だ、……それは英國に限つたことでないが分けて此處の春位詩人の心持を誘ふものはない。

私は倫敦へ歸つて其頃興行中の沙翁の『眞夏の夜の夢』を見ると、森中の



生の贈物（母校への）を一覽した。中には金製の酒杯や銀製の花瓶等が無數に有るのを見た。鏡板に名前を彫ることは近頃廢止になつて今では學生が著名な人物となると、其肖像か胸像を廊下に飾る事になつてゐるさうである。私はマクナテン氏からシエリーの學生時代の逸話を聞き、學校を辭して今日『詩人の散歩場』として知られてゐる昔詩人グレーがワルポールと共に朝夕散歩したといふ林中の道を氏の案内で歩いた。實に英國田舍の春は愉快だ。

それからマクナテン氏の應接室で小憩してゐると、またもや春雨が降り出した。それで馬車を仕立てて貰つてマクナテン孃（私が晝食を共にした四十二三の老孃だ）と一緒に、午後二時頃身體を厚つぼつたい毛布にくるまつて幌のないバギーに相乘りしてグレーの詩で名高い『田舍の寺院』へと出掛けた。馬車の走る路は平々坦々で馬の蹄の音も耳に愉快に響いた。人家を離れて田舍道にさしかかると、道の兩側に鬱然と茂つてゐる木の中から春を歌ふ

幕の背景に地中から軍隊式に並立したチユリップが描いてあるのを見て私は英國の自然に實際こんな光景があるかを疑つた。其後私は溫い日倫敦の郊外のキユー・ガーデンへ行つて見た所が、『眞夏の夜の夢』の背景と少しも違はぬ實景に接することが出來た。恐ろしい杉か樅の木の根元に黃色や赤やのチユリップが、幾つとなく咲いてゐるのは如何にも見事であつた。或る晩私はある倶樂部から招待され行てつた。晩餐の後其席に列した一英國人は私に『是非共ケントへ行つて如何にブルウベルの花が野一面に咲いてゐるかを見給へ』と語つた。私は不幸にしてケントの方面に旅行する機會がなかつたので、英國の春の色をさう澤山見ることが出來なかつた。

月も三月に入つて倫敦も段々春景色を呈して來た。もうそろそろハイド公園の芝生に横たはつて日曜日など其處で遣つてゐる演說を聽くことが出來るやうになつた。私が四月上旬として書いた日記のなかにかういふ文字が發見



せられる。『愈々春だ！　オックスフォード街を歩く女などは最早日傘をさしてゐる。又彼等の歩く樣子が如何にも輕い、さあ一つ出掛けて何か冷いものを一杯飲んでこよう。ああ到頭春が遣つてきた！』

# オックスフォード

急行列車が點火頃の停車場へ着いた頃、私はマックス・ビーアボム（此男は倫敦數多き文學者中で一番粋な人だ）が小説で紹介したズレイカ・ドブソン嬢の事を思つてゐました。嬢の輕い足踏や笑聲はオックスフォードの嚴肅を破つたのでした。天下人多しと雖も、私の如くオックスフォードに關する知識皆無で入込んだものは他に有るまいと思つたのです。實際『ズレイカ・ドブソン』は多少なりともオックスフォードに關係ある書で私の讀んだ唯一の本でした。ドブソン嬢が停車場へ着くと禮帽と胸一杯廣がつた白いシャツの間から鷹の樣な眼が光つた祖父を見出したとあるが、私はオックスフォード停車場で、烏打帽と粗末な襟飾との間に悠然とした長い英國式の顏をさら



け出した桂冠詩宗（ポエト、ローリエト）ブリヂスに依つて迎へられました。桂冠詩宗は非常な名譽職だ。然しブリヂスは桂冠詩宗と呼ばれるのを面白がらぬ中々類のない變人です。私が日本服を着ずにフロックで遣つて來たのを喜ばないやうに見受けられました。少くもオックスフォードでは、今尙ほフロックを着てゐるだらうと思つたのが私の間違でした。ブリヂスは馬車（倫敦のタキシとは異つた愉快な感じを與へます）を雇つてコルポス・クリスチ・カレジへと命じました。『私の大學は小さなものだよ』と言ひ譯けがましく獨語されました。

今入口で番人がゐる所から奥の方を見ると、それが所謂四角形の中座で、聞けば十七世紀の最初建られた圓筒狀の日時計ださうだが、眞黑で不思議な姿に見えて昔默想に耽つた僧侶のみ入るを許された古びた寺院の庭のやうに思はれました。私は持つて來た鞄を番人の所に預けました。食事には間が有るといふので、ブリヂスのいふ儘、オックスフォードの夜景、少くも明日午

後第一回の講演をする有名なモウダレン大學の高い塔だけでも見物しようと出掛けたのでした。靜まり返つて小さな横町を通ると其處がハイ街、詩人ウオズウオースの句に依ると、河の如くうねうねした光榮ある大道へ出ます。ハイ街へ出れば直ぐもうユニバシチー・カレジを後に見るのです。この大學は古い以前には詩人シエリーがゐた學校で、ブリヂスは一度退校を命じたシエリーの像などを立てるなんて愚を極めてゐるよと苦笑されました。私はシエリー讀者の一人で、彼が問題の種と成つた『無神論の必要』といふ一小冊を店頭に並べた爲め歴史上有名となつたマンデー・スレター書店は今尚ほ存在して居るかどうかを尋ねて見たいと思つてゐました。桂冠詩宗ブリヂスは所謂黄金の沈默を喜ぶ先生で、餘りくどくどと質問されるのを嫌ふ。私がオックスフォードへ來る前、ブリヂスは手紙で以て、若し私がペーターやワイルドを餘り多く語ると、オックスフォードは私に愛想を付かすから注意せよ



と云つて來たことが有るので、此處へ着いたならば先づ第一の見物としてペーターの關係大學ブレスノースのノッカーを見たいと思つてはゐたが、ブリヂスに語り出すのを止めました。今モウダレン大學の塔を見上げて感服してゐるにしてもオスカー・ワイルドの關係よりはアヂソンの大學としてモウダレンを見ようとしました。塔は夢の如くに現實離れをしてその色合の柔かで灰色なること恰も詩のやうで、中世紀の幽靈の如く忽ち消えてなくなりはせまいかとも思はれました。

雨が降つてはゐないけれども、非常に濕っぽい道路の中央（今ハイ街を歩いてゐます）は泥だらけで、鋪石がつるつるしてゐる。倫敦を出る時、友人の牧野がオックスフォードへ行くなら僂麻質斯に注意せよと云つた言葉を思出したです。此處の最も好い季節は勿論夏で、夏に成ると樹木は青々し（定

めてモウダレン大學の新建物の前にある一二本の巨木は驚く可き裝をするだらう）學生はフランネル服を着て、口笛吹いて散歩する有樣は見てゐても氣持のよいことであらう。然し冬のオックスフォードも惡くない。『古い時代の灰色の外衣を着けた寂寞』とでもいふ可きものを纏つた冬のオックスフォードです。所謂オックスォフードの教授連半ばは坊主、半ばは中世紀の裁判官とでも云ひたい樣な教授連が、寂寞な冬のオックスフォードと好く調和してゐます。私はブリヂスと前と同じ路を歩いてコルポス大學の方へ歸つて來たのです。ブリヂスは老年ではあるがこんな足の達者な人は稀しい。主人がはといふ責任を感じたものか言ひ譯けがましくかう叫ばれました。

『いやはや人間が民主的に成るのには閉口の外ないぢや、自分の事ばかり考へて少しも公共の感念がないのだね。そりや市會とか町會といふものは有るけれども、その議員などはどんなに道路が惡いのか見えないといふのが不思



議ぢや。注意し給へ滑べるよ。いやあんな俗惡な建物を見ちやいけないよ。ありや全く濟度し難いものだ。然し此處に（今ブリヂスはゴシック式の古い建物を指差し乍ら）實際氣に入つたのがある、オックスフォードの名を穢さぬ程のものだ。我々は現代俗惡な現代……と戰はんけりやならないのだ。嗚呼この民主的といふ事程恐ろしきはないやね。』

大學へ歸る。直ぐ冷水熱湯共に澤山用意されてゐる小さな部屋へ案内されまして、顏を洗つて外へ出て、他の部屋へ行つたブリヂスの出てこられるのを待つてゐる間喫煙してゐた。私は先生と一緒に所謂コンモン・ルームへ入りました。この部屋は心持良く飾附られてゐて、舊式の火を焚く場所には驚く程大きな火が盛んに燃えてゐる。四面の壁に掛けてある當大學に關係ある幾多のビショップの畫像を見てコルポス・カレジは卽ち『耶蘇、聖女マリア又ウキンチエスター、ダーム、バス、ウエルス並びにエキセターの中央寺院

を保護する聖徒』の名譽の爲め建てられたものであるを承知して、自分が一個の異教徒である事を感ずると、何だか變な氣に成らざるを得なかつた。然し考へて見ると、昔は純然たる神學校であつても、今日では左樣でない、卒業生の中には詩人として差詰めブリヂスが居り、又ニウボルトもゐるし、タイムスの演藝批評家としあ知名な人で『英國の演藝界でアデリン・ジエニーの舞踊の外一として神聖なものはない』と放言して平然たるオルクレーもゐると思つて來ると、自分が詩人として此處にゐるからとて何等の不思議は御座らぬと度胸を据ゑました。ブリヂスの畫像も追つてはこの部屋に掛けられて、ビショップの仲間入りをせられることになるでせうと云ふと、彼は『餘り愉快な手合じやないね』と笑ひながら叫ばれました。

食事の時間が來たので、一堂コンモン・ルームを引上げて、ホールへ出掛けました。此處で學校の教授連も、一段高い場所ではあるが、學生諸君と一



緒に食事するのです。このコルポスは希臘研究ではオックスフォード著名の學校ださうであるけれども、教授の中では一人も私に希臘語を話掛けたものがないのを喜んだのです。然し食事は一人の學生が捧げる羅甸語のグレースで始まりました。ブリヂスの說に依ると、當食堂では創立時代其儘の天井板の工合の外一つとして何等見る可きものが無いといふことである。私はブリヂスとエキセター大學の老教授でプラッドレーといふ所謂ヘーゲリアンの中間に坐らされました。何だか倫敦のセント・パーンロミユウで見た羅馬式の大きな重苦しい石の柱に倚懸つてゐる樣な思をしたのです。食事し乍らの談話之が又嚴肅なるオックスフォードに似合ぬ快活なもので、語るは食ふは、段々上品な頓才的の言葉も種切れと成つて、米國一流の所謂ホース・フレーでどつと哄笑一番するといふのでした。食卓の向側に坐つた一人が、天下に名を知られるには無茶を演ずるに限ると云ひ出すと、ブリヂスは直ちに『い

やもつと良い方法は馬鹿に成るのだね』と叫んだのです。ロバート・ブリヂス先生は一寸素人教授といふ形で、中で其役によく嵌つてゐます、實に心持のよいオックスフォードの教授連彼等の兩足は一方は中世紀、他方は大學のコンモン・ルームと虹の様に跨つてゐるのです。彼等のベストを見やうとするには是非コンモン・ルームに於てでなくてはならぬのです。

食後再びコンモン・ルームへ歸ると、早や水菓子が大きな皿に一杯盛上げてある。洋杯なども、手に觸れられん事を待つてゐる様に見えたが、珈琲も用意出來てゐる。壁の上のビショップも、もう馴染といふ譯で、何だか笑つてゐる様に見えたのです。今しがたオックスフォード著名の某哲學者が嘗ては當大學の學生で、學生中非常な流行兒であつた、華盛頓駐在の英國大使スプリング・ライスの事を盛んに話しだして、彼の作つたと傳へられてゐる滑稽詩一鎖朗吟に及んだ。すると一人の教授が、酒杯を卓上に置いて、『あれ



やスプリング・ライスの作ぢやなくて、ケンブリッヂの某が作つたものだと云ふことだ』と云ひますと、『そんなことがあるものか、それこそ世に所謂ケンブリッヂ得意の虚言だ、我々オックスフォードは自分のものを常にケンブリッヂに取られてゐる。然しケンブリッヂの泥棒は稀に成功してゐるばかりだ』と部屋の片隅で眠つてゐるかと思つた一人がむくつくり起きて大聲を出しました。實に罪のない老少年だ。自分共の大學に熱心の餘、無邪氣な子供ぢみた野蠻を振廻はすのです。

喫煙しようといふので、今度はスモーキング・ルームに移りますと、談話は益々花が咲いた。夜も進んで行つてもう早や銀の聲を持つてゐるチャペルの鐘が十時を報ずる頃になりました。チャペルの側を通つて見ると、數多き蠟燭の光は、よく艶布巾の掛つた欅の腰掛を照らしてゐるけれども、誰一人も居らない。ブリヂスは『近頃の學生は聖書を何とも思はぬのだね、君注意

しないと危いよ、此處に段々がある』と云はれました。段々などを注意するのは老人のブリヂスでなくて自分が當然す可きであると思つたのです。如何にも快活で彼は年齢を輕々と擔つて居られるのである。それから直に自動車を驅つて、我々は先生の宅卽ちチルスウエルへと向ひました。今夜は私はブリヂスの客と成るのである。

翌朝十時頃、私は桂冠詩宗に伴はれて、モウダレン大學へ到着しまして、學長ワアレン博士の迎へる所となりました。博士は私の午後の講演には中々多い聽衆を見るだらうと云はれた。朝から三哩（ブリヂスの宅からオックスフォード迄大略三哩ある）も歩いたので疲れてはゐるが、ブリヂスが市内を案内しようと云はれるのを謝絶し兼ねて、出掛けることにした。ブリヂスは『如何に民主論者が古い麗はしい物を嫌ふ』かを見せようと云はれました。



幾多の大學の側や前を通つて休憩しようといふのでボードレアン圖書館へ入りました。ブリヂスは行く行く『一體の民主論者なるものは物がより古くてより麗はしければ、其丈けより深く嫌ふのだ』と言葉を强めて語られ、或る一個の建物を指差し乍ら云はれるには『あの建築を見給へ隨分俗惡だらう、誰一人好むものはあるまいよ、少くも僕は眞平だ、僕の義理の兄弟が造つたのだ』と叫ばれました。此時、ああこれが英國で所謂ドライ・ヒユーモアなるものだ、然し『義理ある兄弟が造つた俗惡な建築』には私は實際驚きました。ブリヂスは失敬だと思ふ程の事を、人が少しも豫期せぬ場合に面白い方法で語り出す、人が眞似の出來ぬキャラクターを持つてゐる徹頭徹尾英國張りの老紳士、それで中々詩人なればこそと思ふ思ひ遣りがある。もうそれぞれ歸らうといふので、ハイ街へと某藥種屋の店の角から出ると『何か毒でも一杯飲まうぢやないか』と云はれる儘藥種屋へ入つて口を濡らしてから、モ

ウダレン大學へと急ぎました。天下に美觀多しと雖も、ハイ街の中央から見たモウダレンの塔を見る位美なる風景は有りますまい。今しがたの冬雲が急に破れまして、青い空が見え出したかと思ふと、太陽の平和な光線が塔の上へ照り下るのでした。私は足早なブリヂスの後を追つて歩いた。行く行く自分は、賣れ殘りの無神論でも小脇に挿んだ第二のシエリーに遇ひやすまいかと思つたり、或は第二のワイルドが、胸か頭に大きな日向葵でも飾つて、窓からでも覗いてやしないかと想像しました。我々がワアレン博士の宅へ着いた時は丁度午餐の用意が出來た時でした。

今夜は、博士の宅の厄介に成る都合なので、二階の一室を與へられたのです。嗚呼これが大學校長の宅、その外觀は左程立派ぢやないが、内部の飾附けはいやはや驚く許り、英國皇太子殿下を保護教育してゐる人の邸宅であると確に受取られました。食後講演の時間迄休憩しようとて、自分の室内へ引



籠つて一寸身體を横にしました。

私はブリヂスとワアレン博士（兩人共大學の正服を着けて居られた）に導かれて、講演のホールへ入りまして聽衆の非常なるのに一驚を喫しました。然し彼等が表示してゐる知的靜肅を見ては、ブリヂスの忠告に關らず、ペーターを論じようが、ロセチを賞讃しようが、少も差支ないと思つたのです。司會者となつたのはブリヂス先生で、講演後ワアレン博士は一場の挨拶をされまして、講演者たる私に感謝されたのでした。講演後ワアレン博士は、私の名譽の爲め茶話會を開かれまして幾多の人に紹介の勞を採られたのです。私の講演は聽衆の點では、モウダレン大學あつて始めてといふ程の盛況でして、自分が詩に對する意見も不滿足乍ら傳へ得られたのを喜びました。茶話會では詩人テニソンの女姪で、今では可なりの老年であるウエルス孃と握手しました。又トリニチー大學のレバー博士と云つて、七八歳頃ウオズウオー

スを親しく見且つ言葉を掛けたといふ老人に面會しました。其時ブラウニングの詩で、

"Ah, did you once see shelley plain,
And did he stop and speak to you,
And did he speak to you again?
How strange it seems, and new!"

の句を思ひ出しましたのです。

コルボス大學の食堂で、學生や教授連と會食した愉快と同じ經驗を、今夜は此處モウダレンのホール（私の講演せる場所が夜に成ると食堂と變ずるのです）で繰返すことに成りました。食卓の周圍には十五名の教授が坐りました。其中には音樂家メンデルソンの孫某が居りまして、其容貌はメ氏を想出さしたのです。スープが終つた頃私は顔を上げて、壁の上に懸つてあるアヂソンの畫像を見ました。風采の正然たる有樣は、夜更しの惡習慣のあつた男とも思へない。彼の生前中、遠き將來日本の一詩人が來て、自身の畫像の下で、食事するだらうとは恐らく思付かなかつたことだらうと思ひ乍ら自ら微笑を禁じ得なんだのです。アヂソンは、私と異つて中々酒量のあつた人なれば、酒杯を擧げぬ私を目して意氣地なしとでも思つたでせう。アヂソンと並んでモウダレン大學校長として歴史の人、百歳迄も長命して有名なルース博士の畫像がある。この人の人を馬鹿にしたやうな眼附き、死んでも尙ほ教授連を高飛車的に監督してゐるが如くに見えました。

モウダレン大學のコンモン・ルームは、コルボスに比して遙に大であり又贅澤でした。澤山の蠟燭の光が四方の欅の木のウォールを照しました。コル

ボス大學よりは遙に大きい火を焚く所があつて盛んに燃えてゐました。此オックスフォード大學のコンモン・ルームの談話位心持のよいものはないと云ふ事は定評であるのです。私がオックスフォード大學教授の生活は中々贅澤なものですねと一人の教授にいふと、教授は滑稽な眼で私を眺め乍ら、『冬でも時には部屋に火はないし顔を洗ふ湯はないこともある。これでも世間ではそれをオックスフォード教授の贅澤と稱してゐるのですよ』と云はれました。私が愉快に思つたことは、幾多の人が私の加州の友人であるミラー先生の名を知つて居たことです。葡萄酒やウヰスキーを澤山教授連は飲みました。私共は向ふと此方と二列に坐つて、二人づつで小さな圓い卓を圍つてゐる。酒の壜を彼方と此方と互に交換するの爲めに、フアイア・プレースの前に二個の樋が横たはつてゐる。其上に、日本の德利の袴見たやうなものが載つてゐて其袴を彼方此方と隨意に引張ることが出來るやう紐が附いてゐる。



こんな子供の遊戯じみた方法で、酒の壜を交換して悠々然として酒杯を傾けるのです。こんな發明は恐らく幾百年前散文的擧動を許さぬと決したオックスフォードの某教授が成したことであらう。嗚呼今でも所謂オックスフォードの靜まりかへつた永遠無終、其靜謐を破る程罪惡と認められるものはありますまい。此處で酒を飲み且つ語つてゐると、世界の帝國が共和政體とならうが、山嶽變じて海水と成つても、我關せずといふ有樣です。オックスフォードは平和である。この平和を時々破るものはチャペルから響き渡る鐘の聲ばかりであります。

喫煙室を出る時、明日は沙翁の古跡ストラットフォード訪問の豫定ですと云ふと、皆の人……少くも三四人は眼を圓くして云ひました、『我々幾十年と英國に住居してゐるが未だストラットフォードへ行つたことはないですよ。』彼等教授の頭ではストラットフォードは、英國の中でないと思つてゐ

るかも知れぬ、少くも羅馬より遠いと思つてゐるらしいのです。

ワアレン博士と眞暗なクロイスターを歩いて行くと、身は僧侶で、祈禱の外は何も知らない男であるかとも思はれました。私は間もなく博士から與へられた部屋の中で、疲れた身體を休めることになりました。親愛なる老ペピーは日記の幾頁かに『寢ることだ寢ることだ』と書いてゐます。疲れて心持のよい場所で寢ること位愉快なことはない。明日は寺院の鐘樓から打ち出す八時の鐘で起きて、先づ第一にすべきことは、所謂アヂソン逍遙の道路を歩いてみることに決しました。



# 文學的英國

エドマンド・ゴス先生は英國文壇の中心點でないまでも、其附近の住者である實證を握りたいと思つたから、私は先生から『夜の接見』(ナイト、レセプション)の招待を受けて喜びました。リゼント公園近くハノバー・テレスの宅へ着した頃は、もう時間も十時過ぎで、二階の部屋は招待を受けた客人の文學者で一杯であつた。部屋の戸が開くと英國交際社會の慣例で、大きな聲で客人より立派な燕尾服を着けた給仕長が新しく着した客人の名前を怒鳴るのであるが、私は私の名前を大きく布告されたので多少驚きの氣味でした。これが私の英國に於ける『夜の接見』の第一經驗でした。ゴス先生は所謂圓轉滑脫で、其文才の典雅であるやうに等しい光澤を人格の上に輝かしてゐました。私は先生の握手に

は溫かい同情が有り、その眼の中には青春の情と熱心の火が何處かに燃えてゐると思ふと、先生が嘗て書いた詩の句が胸に浮かんで來ました。其句は、

『私は死ぬ前、春の
薫菜色の帶で緊かと抱かれたい。
五月の微風は私の面へ
青年詩人の歌を吹きつける。』

私は先生に私の新著『鳥居道（スルー、ゼ、トリイ）』といふ評論文集を奉獻しましたが、先生はこの本を接見室の卓の上に載せて、私の事を知らぬ客人に物語る便宜とせられました。全體年を老つて所謂ヴヰクトリヤ女王朝の臭氣のある老人連は、不思議に人を都合好く吹聽する呼吸を知つてゐる。先生もさういふ『ヴヰク



トリヤ朝の遺物』を以て任じてゐると語つて、自ら嘲つてゐる一人であります。客人の中には先づ第一にホルブルーク・ジャクソンの所謂ホレースの如く古くラムの如く新しいマックス・ビーアボームが居りました。またビーアボームの特調のある靜謐の態度に匹敵する稀な人格の詩人ピンヨンは、妻君と一緒に部屋の騷ぎから離れて戸の側に立つて居りました。このピンヨンの清淨教主義（ピュリタニズム）は嘗て彼が歌つた『芳ばしく落つる沈默に沒入して立つ』所のポルフヰリヲンのそれでありました。

此處に人生と藝術の戰場の勇者なる北方のバイキングが居ります。彼はだれでもなくブランデス先生である。先生は彼の種屬の人としては自然であるが私には多少奇異にも苦しい印象を與へました。然しその眼を見ると力の偉人たると同時に同情の人であるのを實證する其周圍に多くの微笑を發見しました。私が先に話し掛ける前に、先生は私に接近して双手をさし延ばして、

『僕は君を知つてゐるよ。「順禮」以來、僕には君は他人ぢやない。』私は數年前に先生に詩集一冊を郵送した所が、何の返事もなかつたのを記憶してゐるに、今はからずも先生の口から、先生は私の詩集をある丁抹の雜誌の上で評論されたのを聽きました。先生はその文が日本に飜譯されては居らぬかと問ひました。先生の英語と來ては殆ど了解の出來ぬ位の惡發音でありまして、客人の多くのものは私同樣唯想像するのみであつたであらうと思ひました。先生は酒臭い口を私に寄せて、雪崩のごとくに盛んに喋つて居られました。所がゴス先生が遣つて來てブランデスの腕を曳いて、『ブランデスはノグチを專有し又ノグチがブランデスを專有しては迷惑するよ』と笑ひながら語つて、他の客人に引合せる爲め彼を連れて行かれました。

茶菓の時間が來たといふので、私は多くの客人の後について二階を降り、其處でブランデス先生に『御休みなさい』と云ひました。先生は私に、是迄



日本人に直接物を言つた經驗はただの一度だけで、其人は船の船長（先生は或は海賊船長かも知れなかつたと云ひそへました）であつた、そして私を以ての二經驗とするのであるから、私に面接したのは特に先生の愉快とする所であると語られました。

ゴス先生の周圍に集つて組織されてゐる文藝的空氣と全然異つた空氣は、ソホ・スクエーア近くフリッ街に於ける『夜の接見』で發見されました。フリッ街の家には入口を這入ると直ぐ二階三階へ上る大理石で出來た螺旋形の階段だけを見ても、此家が嘗ては伊太利の公使に屬してゐたといふに、充分な證據に成ると思ひました。然れどこの邊の町は羅甸系の人種の無責任な手に放棄されて居つて、古昔は文學者ヘーヅリットが住居してゐた場所であるといふ懷しい記憶を破壞してゐます。だが飜つて考へて見ると、かういふ羅甸化した外國的空氣は、倫敦に於ける青年文士或は藝術家で所謂謀叛者が夜

遲くまで無秩序に自分の藝術的信條を語り合ふ會合には興味ある背景を提供するでは有るまいか。私が新派の彫刻家エプスタインに始めて會つたのも此處で、又立體派畫家リユキスやベルグソンの飜譯家を以て知れてゐるヒユームや、米國人であつて米國を蛇蝎のやうに嫌ふ詩人バウンドに會つたのも此處でした。

段々解散して然るべき時間に成つて來る頃は、部屋中が煙草の烟で一杯になり、その烟の中から壁に掛けてある歌麿か清長の遊女が小さな妖媚な眼を投げてゐて、酒や食物の大きな卓は散々襲撃の爲めに荒されて最早や分捕品の何物も殘つては居らぬでありましやう。又我々の談話も英國の藝術的愚鈍を罵倒し盡してその語彙(クラカブラリー)を空しうしたでありませう。

牛津(オックスフオード)と倫敦との間何たる精神上の相違があることを發見するでしやうか。牛津大學に於ける文學的に嚴肅な空氣は、私がワーレン博士とブリヂス



先生に導かれてモウダレン大學のホールに臨んだ時實に緊張してゐたやうに感ぜられました。エマソン先生に依るとウヰルソン工場が絨氈を織る樣に牛津大學は希臘語の工場であるさうである、故に私は牛津へ行くと私の聽衆から希臘語で質問でもされやすまいかと心配して居りましたが、その心配は杞憂に過ぎなかつた。大學總長ワーレン博士は有名な希臘文學の研究者ではあるが、極めて平易な英語で私に話しかけて私の無學を故意に暴露させやうとせず、又桂冠詩宗の案内でボドレアン圖書館へ行つても、私は寧ろこの圖書館で有名なA・p八百九十六年のプラトー原稿或は同世紀のバジル原稿、或は千四百五十年にメンツで印刷された最初の聖典を見せられなかつたのを喜びました。メルトン圖書館へ行くと數世紀以前に於いてのやうに書物が依然として箱の板に鏈付けになつてゐるのを見ても、如何に牛津が保守主義であるかが分る。私のホールに於ける講演が濟むと私の名譽の爲めとあつて接見(レセプション)

が開かれまして、此地に住居し或は一時的に訪問してゐた數ず多き人に紹介されました。晩餐は私の希望で、大食堂（私が講演をしたところの大廣間が夜に成ると食堂と化けるのである）で學生や敎授と一緒に食事しました。食事の始まる前一人の學生が敎授連の坐つてゐる一段と高い場所へ近づいて聲嚴かに羅甸語の祈禱で、何でも Benedictus benedicat; benedicitur, benedicature といふやうな發音を耳にしました。食後慣例とあつて敎授一同はコンモン・ルームへ引上げて此處で珈琲を啜つて雜談を闘はしたが喫煙は喫煙室へ行くまで許さぬといふ不文律を破るもの一人もなかつた。如何に牛津生活が整然たる組織の下に統一されてゐるかは、また彼等が十時の寺院の鐘聲を聞くと、揃つて喫煙室から一同が靜々と銘々勝手の寢室へ急ぐのでも知ることが出來ませう。コンモン・ルームの談話中に、私は米國の舊恩人ミラー先生の文學に親んでゐる敎授を發見して非常に愉快と思ひましたのは倫敦の文



學社會では殆ど同先生を記憶してゐるものがなかつたのを殘念に感じてゐたからでした。

桂冠詩宗ブリヂス先生、聞く所に依ると同先生は年齡既に七十を越えて居られる老人ではあるが、開戰以來日々ボーアス・ヒルの私邸から毎日牛津へ出掛けて、義勇兵の一員として軍務に從事して居られるさうであるが、此先生位完全に保守的であつて而かも同時に進歩主義な牛津を代表してゐる人はない。如何にも眞實なる牛津の子供である。先生は詩に牛津を詠じた作が中多い。先生の忠實に傳習を追つたエレジーは英文壇の珍とする所である。私は先生が左の句を書いた場所へ案内して呉れなかつたのを遺憾に思ひました。

「長い木の枝が

川や草の上で、
清明な軒を編む所。
後に殘された水の渦(うづ)が
木の葉と難船を遊戯し
高慢な鵠(はくちう)が
一一
流れと太陽から帆走りでて
魚がひややかに
好きな水渦に横たはる所。』

私は一夕正客として倫敦の詩人倶樂部から招待されました。時の司會者はタゴールの同情者として有名な詩人兼批評家なるアネスト・リス氏であつた。



氏は私の講演が濟むと、一場の挨拶をしたが其中に、『野口氏の文學上に興味あるのは、氏が英文壇の古い傳習を破つて新しい效果を發見した點で、其點は英國的であるよりは寧ろセルチックで更に云ひ替へるとシムリック（ウエルシュ）の特調を帶びてゐる』と云はれました。私の英語は決して立派なものでないから、私の所說が適當に了解されたか否は保證の限りでないけれども、私は聽衆の文學者に喜ばしい印象を與へ得たのを愉快に思ひました。ロース孃といふ年若い歌唱者が私の作品から四五の抒情詩(リリクス)を朗吟しましたが作者の私も華美な發音の爲め、自分の作であると思ふことが出來なかつた。私は興奮してゐたので、私の前に坐つてゐる某夫人の卷煙草を悉皆吸つて仕舞ひました。斯かる場合の英國の慣例(インブリッシュ)として常に討論(レビュウ)が始まるので、其幕が出ると一青年が立つて英國評論の中で發見した日本の詩の標本として二つの詩を紹介しました所が、それが私が以前にかいたものであつたので

ありました。それから他の倶樂部員が立つて、昔日本に詩歌を愛する裁判官がゐて罪人に歌か發句を作らせてその出來工合で罪の大小を定めたさうであると語ると、他の人が『若しも我々倶樂部員が斯かる裁判官の面前へ引出されたならば我々の受く可き判決推して知るべきのみであらう』と云つて人を笑はせました。

私が英國滯在中に出入した倶樂部や會合の中、私はヴヰクトリア・エンバンクメントに添つたヴヰクトリア・ガーデンスの樹木や草花を見下してゐるサベージ倶樂部を語りたいと思ふ。このヴヰクトリア・ガーデンは極めて小さな詰まらぬ小公園に過ぎぬけれども、私は寧ろ私が社會的に一種の浮浪人無宿漢である態度を恣にするにはハイド公園乃至ケンシントン公園より此處を選みたいと思ふのである。昔はヘロホリアの殿堂の前に立つてゐたと云はれるクレヲパトラのニードルも此サベージ倶樂部の窓から見ると、若しもそ



れが冬で霧でも懸つた午後でもあらうものなら、實に他國では見ることの出來ない壯觀に接することが出來る。私は一度小説家（今では日本美術の批評家として令名ある）モリソン氏に招待されて、此倶樂部で所謂ハウス・デナーなるものに出席したことが有つた。

食事をしてゐると私は種々十八世紀の倶樂部生活の全盛期時代を追想しました。今日でもさうであるが十八世紀の倶樂部と來ては、アデソンが嘗て言つたやうに徹頭徹尾食ふのと飲むので持ち切りであつた。私の想像の眼は此處に、男振りの良い青年が派手な服裝麗しい襞線の附いた繻子の着物を纏つて、一寸とした事件の行違ひまでも劒の先きで決しやうとする荒つぽい氣象の豪華子を見るのであります。ワルポールの云ふ所に依ると、あるサインなる男はアルマクかロコア・ツリー倶樂部で二箇月も掛つて十二萬圓位博奕で勝つて居ては仕方が無いとぶつぶつ云つたといふことである。私は今日でも

博奕が英國の倶樂部で生きてゐるかは知らない。假令生きてゐても十八世範に於けるやうな潑剌たる活動は致してはゐまい。確に斯かる奇傳的冒險を失つてはゐるが、一方今日の倶樂部は英國組織の上に一制度としての權威を保持するに至つてゐる。このサベージ即ち野蠻倶樂部もその一で、所謂ウエスト・エンドに散亂されてゐる數多い倶樂部より精神上で遙に自由で平民的である。それは其所在地のアデルヒ・テレスとペル・メルやピカデリーとの間の相違を見ることが出來る。

ハウス・デナーなる食事の會合は極めて躁暴の歡喜を發揮したもので、制限を顧みぬ自由な行爲を主張してゐるとも云ふことが出來る。司會者が食事も既に珈琲を飲む時間に入つてゐるのを見ると、立つて卓上を米國土人が持つてゐる戰斧（トマホーク）の模型みたやうなもので敲いて云ふのに、『我々兄弟の野蠻人よもう喫煙し初めてもよからう。』諸君は司會者の命令を守つて歌へと云へ



ば歌はねばならぬ、又彈せよと命ずれば彈せねばならぬのである。美術家が顯れて席畫を書くのもあるし、又定席藝人の一人は滑稽小話で一座をどつと哄笑せしめるのも有つた。如何にも氣の置けない打解けた一家族の會合であると合點しました。私の左側、之もモリソン氏の客人として出席した人で小說家ジエコブスといふ人が私に盛に英國に於ける出產の率が減少するのを遺憾として、大きな眼をきよろ付かして日本の愛國心を嘆美して居りました。

此野蠻倶樂部の對照としては、是非共私は嘗てデヲシー氏の客人として出席した“Ye Sette of Odd Velumes”（珍書の一組）といふ不思議な名目を帶びた倶樂部を擧げたいと思ひます。此倶樂部は元來は二十一名限りといふ最も精選せられた月一回の會合であつたが今日では會員の數を四十一名に增加してゐる。會合の日にピカデリー近くのヲッデニノといふ料理屋へ行くと牧師ロースデールが儀式の司として手に長い杖を持つて入口に立つてゐるし、

小説家のラルフ・ストラウス氏が會長の役として、胸間に銀製で此處其處に著色した大きな賞牌で飾りたてて、集つた會員や又會員が誘つたそれぞれの客人に挨拶をして居りました。會員も一人以上は招待することが出來ぬ規約であるさうです。食事は會長ストラウス氏の前に運ばれた大きな鍵で卓上を敲いてから始まりました。それは此鍵で會員卽ち『珍書』の箱を開ける意味なのでせう。又木製の本の模型も會長の面前に置かれてあるのであります。其夜の食事は羅甸語か何で書かれた獻立通りに進みまして、間もなく私はこの倶樂部は『珍書の一組』などといふからには學者的會合であるかのやうに思はれるけれども、實際は最高義に於ての社交的で友情を增進するのが大目的であるのを知りました。私の側に坐つた某サーの稱號を持つてゐる紳士は日本人たる私の出席を知つてゐたのか知らずであつたか、服のポケットから十七世紀の象牙細工の根付を、恰も手品師のやうに三つも四つも出して私に



見せました。此人も英國の上流社會に珍らしくもない美術蒐集者の一人で而かも定めて有名な人であらうとも思ひました。私の前に坐つた人は私の滯英期限を質問して、私に是非共英國の五月を見て、『如何にブルー・ベルがケントの田野で麗はしく咲くか』を實驗せねばならぬと云ひました。私はケントが何の方角であるかは知らぬが、春さへ來れば直にケントへ向つて其人の厚意を忘れますまいと云ひました。食事も段々最後のコースまで遣つて來て滿腹のため苦しささへ感じたので、私は椅子を後へずらして獻立に書いてゐる文章を讀むと、英語の古文字でかう書いてあるのを見ました。『食ひ飲んで食事が濟むと、暫時休憩する、そしてから我々は再び集つて兄弟のジョウヂ・ウキルリアムソン卽ち時計師が立つて、ルドウキク・マグルトンの一代記竝に彼の宗敎を講演して諸君の興味を添へる云々。』 此人も何か有名な科學者か何かである爲め、故に時計師と異名を貰つたのであらう。この倶樂部

の會員は皆それぞれ異名を持つてゐる。私の友人デヲシー氏は通譯者、氏の性質の特徴と器量を知つてゐる人には此通譯者なる異名が如何に適切であるかを知るであらう。會員の中には故イースト氏（畫家）も有つた。出版者レーン氏もその會員である。

講演の始まる前に會員がそれぞれ連れて來た自分の客人の名前を紹介的言葉を多少付添へて語ると、皆の人が拍手して歡迎の意を表するのである。我我客人を代表して在倫敦米國の總領事某が挨拶のかはりに米國の文學を語つたのは聊か場合に適合せぬやうにも思はれ、又その演說が極めて皮相觀であつたから我々の中には、輕蔑の表白さへ無遠慮にするものもないではなかつた。この總領事先生が胸に挿んだ大きな薫（バイラレット）菜の束は私が倫敦に入つて以來始めて接した無邪氣で派手な觀物であつたのでした。米國人は斯かる突飛な行爲を平然と演ずるのを愉快とする樂天主義者である。



『時計師』の講演は中々興味津々たるもので、講演後數多くの人々が起つて自分の意見を述べました。私の友人批評家のジャクソン氏も、英國人には由來言論上の不一致を誇る特質を持つてゐるといふ點から面白く論じました。マグルトンの寫眞やその宗旨の連中が幾多の迫害を避け乍ら私かに會合をした場所は私に日本の禪堂を想起せしめるのでありました。それから大の男で而も學位の三ツや四ツや或はそれぞれ專門で一頭地を拔いてゐる不惑以上の年配の英國紳士が大きな聲で倶樂部の歌を終つて解散するのでありました。その歌の一節にかうありました。

『人間は人情の本で、生れてから死ぬるまでに及んでゐる、
時（タイム）が默して我々の本をはねて、各頁を數へる、
一日時が本の一組を勘定して、云ふ「これは珍本だ、

二十一冊ある、だが四十一冊まで殖えてもいい。」

僕等は珍だ、甚だ珍だ、君信じ給へ、僕等は珍だ。

時がそれぞれ僕等を目錄付ける、

一組は二十一冊だが、

四十一冊まで殖える。」



# 文藝界の英婦人

數年前死んだレデー・キャンベルは倫敦切つての女で、才美兩刀の武器を持てゐました。彼女は今春逝去された現英帝の叔父アーガイル侯の伴と一時結婚したが破鏡の嘆を招き、其後は美術批評をウォールド紙上に擔任してゐました。私がこの貴婦人に遇つたのは二十年前で、その節私は掛替へる襟飾一箇の贅澤さへ出來かねた貧書生時代でしたが、英詩で以て英京を唸らせ呉れんず決心で渡英した際でした。一夕レデー・キャンベルに招かれて、如何にも憐れな姿をレデーの大きな立派に飾立てられた接客室内に顯はしたのです。向ふは音に名高き愛耳蘭美人、色は鮮やかな櫻花で、毛髪は金、背の飽くまで高い身體を意氣な着物で包んでゐました。英國では蛇の如き樣子を嬉

しがるのですが、其蛇の如き雅麗な身體を椅子の上へ横様に投げて、恰好の良い白い腕を差延ばし、側なる銀製の煙草箱から一本極めて細卷きのシガレットを取出して、一口二口吹いたかと思ふと惜氣なく火の中へ投付けて、睫毛の長い麗はしい綠色の眼を此方へ向けて、『所でですね』と話を續けた其工合其樣子たらなかつたのですよ。今日でもレデー・キャンベルを想ふと眼前に彷彿します。其時は私は紐育から倫敦へ着いた間際で、女は喫煙せぬものと米國流に考へてゐたのですからレデー・キャンベルの伊達な喫煙振に一驚したのです。

所で、今回十年振りで渡英して又ぞろ驚かされたのは、誰も彼も大部分女が喫煙するといふ事でした。十年間の變化ですから喫煙位は變化中の一小變化でせう。十年前は上流の交際社會に限られてゐたのが、今日では中流社會の女連で先づ喫煙せぬのはない位ですよ。私は着英（倫敦へ着した事です）



の翌日、友人に連れられてピカデリー附近の料理屋トロカデロの食堂に入つて晩餐を共にしました。食事中は談話に實が入つて此食堂に坐つてゐる二百人足らずのお客に注意を拂はなかつたのです。食事が濟んでいざ歸らうといふ段取りで、身體を一寸背伸びをして周圍を眺め廻はすと、十年間も日本に引下がつて華美な社會から遠ざかつた私の眼には、一種異樣な光景、向うの風習として男女食事中盛に喋べる其聲が急に自分の耳を劈く、食事を終つて例の如く珈琲を飲み始めてゐる。食卓からは卷煙草の煙が二ッ三ッ嵌めた花車な女の指先きからも盛に上つてゐる。女連の樣子と云つたら身體をぐにやつと卓上に凭れかかつてゐるのもあれば、椅子を後部へ引離して其上へどつかと大きなお尻を落して、吸込んだ煙草の煙を悠々と口を窄めて吹出してるものもある、彼等の坐つてゐる食卓の場所と電氣の光線の工合では、煙草の煙で顏が夢の如く薄ぼんやりして、卷煙草の灰をはたく指に嵌めた金剛石が

びかっとしてゐるのもある。

此光景は倫敦で始めて見られ得るので東洋などでは思ひも寄らぬ。倫敦でもウエスト・エンドで、此處ピカデリー・サーカス（此處の夜景を友人牧野義雄君が巧に描いて『倫敦の色彩』といふ本の扉に入れてゐる）を中心として四五町の間に散つてゐる大旅館或は料理屋の食堂で見られ得る光景です。ウエスト・エンド（倫敦全市を東西南北に分けて西の端で一番繁榮を極めてゐる所）に出入する婦人、怪しい商賣人は勿論のこと、立派な連中が巴里化したのには隨分驚いたのです。

以前英國の婦人と云へば日本で所謂賢母良妻主義、惡く云へば極點迄野暮で、良く云へば賢實、今では服裝だけ見ても生え抜きの巴里ッ子と間違へられる連中も少くない。午後三時頃から四時半へ掛けてピカデリーを上つてハイド公園の方へ向ひ、ボンド街へ五六町といふ邊を徘徊いて見給へ、近代式



のスカート、後から見るとツンツルテンの着物を小意氣に洒落からかした日本の女を見る樣です。昔は英國の女と來ちや隨分不恰好の靴を穿いてゐたものだが、米國靴の侵入と短いスカートの流行とで英國人でも上等の靴を穿く樣に成つたのです。

靴の變化ばかりでない、靴下など素敵に地の薄いものを用ひるので、肉色の靴下を着けた女などを見ると一見素足ではないかと疑はれる位です。思へば不思議です、十五六年前ポンチ雜誌上著名の滑稽畫家デユモリエルが、小說でトリルビーを世に紹介した時分には、所謂ビユリタニズムが盛んで脛をちらりともさせる事が出來なかつたので、トリルビーの素足が非常に問題に成つたものだ。此處十年も經つたならば舞踊の名人イサドラ・ダンカンの樣に、素足で希臘式の皮草履を穿いて倫敦市中を横行する英國の婦人を見るやうになるであらう。又足不相當な小さな靴を穿いて痛さうに歩いてゐる女な

どを見ると、支那纏足は笑へた義理ではない、かう成ると、所謂英國常識の存在を疑ひたくなるのです。斯く英國の女が巴里化するに至つたのは政治上英佛接近の影響で、又佛國の方でも日曜日などには英國風に靜肅を守つて來たのを見ると、佛人としては柄にない眞似をしたものだと惡口が云ひたくなるのです。

夜會などへ出て來る婦人連、夜會ばかりでない、女の倶樂部とか、芝居とかへ集る連中の服裝上の奇拔はいやはや驚くばかりです。私は着英第一にゴス先生の夜會、引續いて一週には少くも三ツや四ツはさう云ふ場所へ引出されたので、多少其邊の消息を知る便を得ましたが、ゴス先生から夜會は十一時から始まるとの通知を得た時は不思議に思ひました。十一時！　日本にゐた時夜の十一時頃はもう白河夜船です。然るに英國では紳士淑女共に夜會から歸宅する頃は二時過ぎなのです。日本にゐて婦人連との交際は十年も斷た



れてゐた私が、突然、半分も身體を裸體にした、假令着物を付けてゐても極薄い絹のドレーバリーを捲付けてゐるばかりの娘や、奥樣に膝を突付けられて喃々話しかけられるのですから、最初の印象は不愉快といふよりは頗る異樣でした。

シャフスベリー街と云へば倫敦での芝居町、其處から一寸横へ入るフリス街、昔は中々目拔の場所であつたが今では伊太利人や佛蘭西人の巣窟、此町のソホー・フクエーア近くで新派の詩人や畫家が毎火曜日の晩夜會を張る。私も友人の詩人モンロウに連れられて二三度行つた事がありますが、部屋の壁には日本の歌麿や北齋の木版畫、或は古い和蘭製の皿などが列べてある。中央の卓にはウキスキーの德利と曹達水、高く盛上げた果實、部屋に集つた男や女（さう云ふ夜會には女の數が男より多くて時に依ると七三の割といふことさへある）や、得手勝手に飲んだり食つたりする。喫煙は勿論の事、談

話も平凡ぢやない、女だてらに政治を論ずるものさへあるし、藝術談、芝居の品定め、私は女の連中から現今英國で所謂立方畫として著名なるルイスが散々油を取られて居るのを見ました。英國の女特に知識階級の女と來ては手も口も八丁です。

倫敦にポエト・クラブ（詩人倶樂部）がある。此倶樂部には美人が多いといつて誇つてゐます。私はポエト・クラブから一夕正賓として招かれて一場の講演をしまして、倶樂部の連中、勿論女の數が多かつたのですが、食後彼等の談話は中々振つたものです。女の中には文筆や藝術で衣食してゐるものばかりでないのです。私が正賓として招かれた時には、私は女の金滿家モスコクルとかいふ人の側に坐らされたのです。ポエト倶樂部ですから會員は作詩の經驗といふが必要條件で、下手乍らも何か書いてゐる連中なのです。倶樂部の例會では自分の詩を朗讀して、それぞれ批評し合ふので、私は此例會



にも列したことがありましたが、男子より女子の方が多かつたのです。そんな風で英國では作詩家は數の上では女が勝つといふことに成るのです。

此例會にさへ女の事で特に自由と獨創力を貴ぶ社會のことであれば異樣の服裝で來るのがある。丁度其時でした、新聞紙上で巴里の交際社會では女が青い鬘を被ると出てゐました所が、既に青い鬘の女が倶樂部の例會へ出席してゐるのを見ました。青い鬘！　餘りに奇拔ですから流行にはなかつたやうですが、其當時の上流社會ではぱつぱつ見懸けました。倶樂部の會合では青い鬘の女はワイルドの親友で一寸としたワイルドの傳を公にしたカウンテスの稱號を持つてゐる婦人でした。

英國の婦人で中流社會でもウエスト・エンドに集つて來る蝶や蜻蛉で自由と伊達とを主張するものばかりではなく、淑德の威嚴を輝かしてゐる女もあるのです。其一例として私は女詩人メーネル夫人を擧げます。

此夫人は女でこそあれ英國切つての詩人で、ヲースチン逝去の際桂冠詩宗の問題で其候補者として聲の高かつた人です。私は一夕メーネル夫人に招かれて晩餐を夫人の一家と共にしました。今でこそ故トムソンは推しも推されもせぬ立派な詩人として認められてゐるけれども、生前中は眠るに家なく、食ふに食のない悲慘なものであつた時代に、唯一の友人と成つて助力したのはメーネル一家でした。夫人は中々子寶に富んでゐる。それが皆有望な文學者で、中にはフランシスとて婦人參政權問題で私の友人ネビンソン氏と共に投獄された人もある。此フランシスは詩人です。

娘の中ではバイオレットといふのが未だ二十三の娘盛りであるが小說家として著名です。メーネル夫人はもう若くはなくて、痩形な背の隨分高い女で今から見た日には古風で所謂ヴイクトリア女王時代式、品もあり情の香が高い人で、此人が八九人の子供に取卷かれた女王といふ格です。この人の詩に



『不變』と題するもので自分の詩は世界を吹廻はる西風の如く、永久に死せぬといふ意味を詠じたものがある。『余は全世界をして余の藝術に答へしむ。汝の耳に對しては余は永遠に不變なり。余の胸中の思想これを譬へば一握の雲か、余は其雲に依りて泣ける赤兒の如く抱かれて眠る』などといふ原文では妙を極めた文句があります。單純で一種の味ひのある小篇では『夜明け時夜の歌ふ詩』が有名です。その二句に、

『あらゆる星に捨てられ、
夜明けの風にゆすぶられ、
余は何處にか行かむ』

『山の懷、

## 小松の枝か、
## 或は盲人の眼の中へか」

私のメーネル夫人一家と食事を終るとみな打揃ってドロウイング・ルームに入つたのです。此處で一座のもの達は歌をうたつたり、手品をしたり、隱藝の總溫習が始まり、私の番になって、是非、日本の小唄を一ッといふ注文でしたから端唄一鏈を歪みなりに唄ひ終るとバイオレット・メーネル女史は感に堪へぬ樣子で『これはサッポですね』と嘆息せられたのには意外な賞讃者を得たものだと思つたのです。

英國婦人の研究では、更に下流に及ばねばならぬ。下流の婦人でも圖書館或は博物館など錢要らずに或は安價で、自分に決心さへすれば自由に知識を得る事が出來る。英國で無學の境遇にゐるのはよくよくの女です。英國で芝



居の始まるのは先づ八時十五分一時間前から三階に坐り込んで一夕の愉快を得ようとする、貧乏ではあるが才智勝れた會社の書記をしてゐるとか商館の賣り子とかいふ女の連中、さういふ一種の女が英國では女權論者です。數珠つなぎになつて一列に竝んで芝居の戸の開くのを待つてゐる連中の中には、待つてゐる間を無駄にすまいとして讀書してゐるのが多いのです。私も彼等と一緒に見物してその批評を聽くのを非常に愉快としたことがありました。又、倫敦市中に散在する安價な料理店ライオンとかエー・ビー・シーとかへ午後一時半頃に入ると此種の女で席は一杯です。女の中には例に依つて食事し乍ら讀書してゐるのが多い。私は一日のこと、どんな本を讀んでゐるかと思つて一人の女の書物を覗き込むとベルグソンの哲學書であつたのを今に記憶してゐます。

二十年前では下等の英國の女で醉拂つて大道に横たはつてゐるのを見たも

のですが、今日では喫煙は盛に成つたが酒は餘りに飲まぬ傾向と見えます。私の滯在中は一人も醉拂つた女は見ませんでした。否、一人ありました。青年詩人メスフキールドを訪問する時、詩人の所望で日本服で出掛けました。同行者は美術寫眞家として有名なコウバーン、その歸路ハムテツトからトーテンハム・コート・ロードへ來る地下鐵道の列車中、一人の醉拂つた女がゐて、私の袴の樣子が異樣に見えたらしく、『此男は女のスカートを穿いてゐる』と怒鳴つたのでした。私より同行者のコウバーンが閉口して非常に氣の毒がつたのでした。然しこんな不行儀な例は廣い倫敦でも少いのです。

英國の女は自分で突飛な服裝をする自由を持つてゐるので、他人の樣子を見て眼を欹たせたり無理な笑をしません。日本服で押廻つて歩けば一寸は女共は振返ります。しかしそれはただの瞬間です、着てゐる日本人の方では少しも不愉快でありません。彼等は英國の男子と等しく自己の特徴を服裝に至



るまでも發揮するのを生命としてゐるのです。さればこそ英國の婦人社會にバンクハストとかベッサントとか小説家にワード夫人などがあるのも何の不思議でないのです。

文中メーネル夫人は今は故人です。

# 野口米次郎
## ブツクレツト

各冊六十錢　送料四錢

第七編　歌麿北齋廣重論　菊判特製本別冊　口繪三十二枚入　定價一圓六十錢

第一編　芭蕉論
第二編　光悅と抱一
第三編　松の木の日本
第四編　能樂の鑑賞
第五編　米國文學論
第六編　光琳と乾山
第八編　春信と清長　絕版
第九編　寫樂　絕版
第十編　蕪村俳句選評
第十一編　芭蕉俳句選評
第十二編　ポオ評傳
第十三編　小泉八雲
第十四編　萬葉論
第十五編　神祕の日本
第十六編　詩の本質
第十七編　人生五十年
第十八編　蕉門俳人論
第十九編　眞日本主義
第廿一編　戀愛の詩人
第廿二編　自然禮讚
第廿三編　印度の詩人
第廿四編　米次郎隨筆
第廿五編　米次郎獨語
第廿六編　米次郎講演
第廿七編　霧の倫敦
第廿八編　イエーツ・シヨウ論
第廿九編

第二十編　春信清長寫樂論　菊判特製本別冊　口繪三十二枚入　定價一圓六十錢

此叢書は著者の定本全集となるまでの毎月二冊づつ刊行いたしますもの



大正十五年拾月廿七日印刷
大正十五年十一月壹日發行

野口米次郎ブツクレツト
定價六十錢

著者　野口米次郎
發行者　長谷川巳之吉
組版所　生田數文社
印刷所　第一書房印刷所
東京市芝區下高輪町二二
發行所　第一書房
振替東京六四二二三
電話高輪一二九四

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 上田敏遺著 | 上田敏詩集 | 四六判七百六十頁 背皮金泥美本 | 定價 三圓八十錢 | |
| 野口米次郎著 | 表象抒情詩 | 四六判百四十頁 背皮金泥美本 | 定價 一圓八十錢 | |
| 野口米次郎著 | 第二表象抒情詩 | 四六判百四十頁 背皮金泥美本 | 定價 一圓八十錢 | |
| 堀口大學著 | 詩集 砂の枕 | 四六判二百八十頁 表紙木判刷美本 | 定價 二圓 | |
| 堀口大學著 | 譯詩集 月下の一群 | 菊判七百六十頁 背皮金泥美本 | 定價 四圓八十錢 | |
| アポリネエル著 堀口大學譯 | 動物詩集 | 四六判ジュフイ畫 繪入金泥銀泥美本 | 定價 二圓 | |
| 佐藤春夫著 | 佐藤春夫詩集 | 菊判本文二色刷 表紙木判刷美本 | 定價 二圓八十錢 | |
| 日夏耿之介著 | 日夏耿之介詩集 | 全三冊豫約非賣品 | 讓價 五十圓 | |
| 三富朽葉遺著 | 三富朽葉詩集 | 四六判八百八十頁 背皮金泥美本 | 定價 四圓五十錢 | |
| 堀口大學譯 | 譯詩集 空しき花束 | 初版別製 | 近刊 | |
| 三木露風著 | 三木露風詩集 | 初版別製 | 近刊 | |
| 西條八十著 | 西條八十詩集 | 初版別製 | 近刊 | |
| 茅野蕭々譯 | リルケ詩集 | 初版別製 | 近刊 | |



| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 土田杏村著 | 日本 支那 現代思想研究 | 菊判三百餘頁 | 定價 二圓五十錢 | |
| 土田杏村著 | 戀愛の諸問題 | 四六判四百九十頁 總クロオス美本 | 定價 二圓三十錢 | |
| 矢野峰人著 | 近代英文學史 | 菊判八百卅頁特刷 挿繪入總クロオス美本 | 定價 六圓五十錢 | |
| | | | | |
| 矢野峰人著 | 詩學雜考 | 四六判百八十頁 白バクラム美本 | 定價 一圓五十錢 | |
| 三木露風著 | 露風詩話 | | 近刊 | |
| 慶大教授 ヴアインズ著 | 野口米次郎論 | 四六判二百四十頁 口繪入バクラム美本 | 定價 一圓八十錢 | |
| | | | | |
| | | | | |
| 野口米次郎著 | ブックレット(既刊廿五冊) | 四六判百二十頁 口繪入三枚或四枚 | 各冊 六十錢 | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 松岡讓著 | 法城を護る人々 | 四六判全三册 白布金泥美本 | 上卷生活篇 二圓六十錢 中卷信仰篇 二圓三十錢 下卷批判篇 二圓六十錢 |
| 佐藤春夫著 | 女誡扇綺譚 | 四六判百三十頁 背バクラム木判刷美本 | 定價一圓 |
| 岸田國士著 | 岸田國士戲曲集 | 四六判二百八十頁 背クロオス國入美本 | 定價一圓六十錢 |
| 田島淳著 | 田島淳戲曲集 | 四六判二百八十頁 背クロオス國入美本 | 定價一圓六十錢 |
| 佐藤春夫著 | 佐藤春夫戲曲集 | | 近刊 |
| 飯塚友一郎著 | 歌舞伎細見 | 菊判千二百頁 挿繪三百餘美本 | 特價八圓五十錢 |
| 灰野庄平著 | 大日本演劇史 | | 近刊 |

第一書房刊行書目

| | | | |
|---|---|---|---|
| ポオル・モオラン著 堀口大學譯 | 戀の歐羅巴 | 菊判三百四十頁 背赤平金泥美本 | 定價二圓五十錢 |
| ポオル・モオラン著 堀口大學譯 | レキスとイレエン | 菊判總バクラム用紙書簡紙美本 | 定價二圓 |
| ジュル・ロオメエン著 堀口大學譯 | ドノゴオ・トンカ（キネマシナリオ）（科學の奇蹟） | 四六判二百四十頁 木判表紙藤酒 | 定價一圓三十錢 |
| フィオナ・マクラウド著 松村みね子譯 | かなしき女王 | 四六判二百九十頁 | 定價一圓八十錢 |
| ジャン・ラシイヌ著 内藤濯譯 | 悲劇 ブリタニキュス | 四六判背皮四洋木版色刷二枚美本 | 定價二圓 |
| | | | |
| | | | |
| 柴田天馬譯 | 聊齋志異 | 菊判三百九十頁 唐紙帙入美本 | 定價三圓 |
| | | | |
| | | | |
| | | | |

# 第一書房刊行書目

| | | | |
|---|---|---|---|
| 大田黒元雄著 | 洋樂夜話 | 四六判二百八十頁 黒赤クロオス美本 | 定價二圓 |
| 大田黒元雄著 | 歌劇大觀 | 四六判八百頁函入 總クロオス美本 | 定價四圓 |
| 大田黒元雄著 | 名曲大觀 | 四六判三百十頁 黄布表紙美本 | 定價二圓 |
| 大田黒元雄著 | 靈西亞舞踊 七百五十部限定出版 | 四六倍判原色版十枚寫眞四十枚 特製最上本 | 定價十圓（十五年中）特價七圓五十錢 |
| 大田黒元雄著 | 音樂の横顔 | 四六判二百八十頁 挿繪十枚美本 | 定價二圓 |
| 大田黒元雄著 | 海外音樂旅行 華かなる回想 | 四六判二百三十頁 背黒バクラム美本 | 定價二圓 |
| 大田黒元雄著 | 西洋音樂入門 | 四六判樂譜入 總クロオス函入 | 定價一圓三十錢 |
| 大田黒元雄譯 | 水の上の音樂 | 四六判二百三十頁 背白バクラム美本 | 定價二圓 |
| ロマン・ロオラン著 大田黒元雄譯 | 近世音樂の黎明 | 菊判三百三十頁 バクラム鎖クロース挿繪十二枚美本 | 定價三圓五十錢 |
| ロマン・ロオラン著 大田黒元雄譯 | 過ぎし日の音樂家 | 菊判四百五十頁 | 近刊 |
| アダム・カアス著 大田黒元雄譯 | 管絃樂及び管絃樂法の歴史的研究 | 菊判五百餘頁 樂譜入バクラム 總クロオス美本 | 定價五圓 |
| シリル・スコット著 大田黒元雄譯 | 音樂に關聯せる近代主義の哲學 | 菊判二百餘頁 | 定價二圓 |
| リムスキイ・コルサコフ 服部龍太郎譯 | ロシヤ音樂年代記 | 四六判 挿繪十葉美本 | 定價二圓 |

548
5

終